
アイアリス ～闇の女神 夜明けの大地～

風梨凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイアリス ～闇の女神 夜明けの大地～

【Nコード】

N3760T

【作者名】

風梨凜

【あらすじ】

邪神となったアイアリスに囚われたゴットフリーの行方が分らぬまま、ジャンたちの黒馬島での生活が1年経った。だが、毎夜、現れる幻の黒馬に触発されたかのように、邪気、海の鬼灯が彼らに攻撃を仕掛けてくる。一方、ゴットフリーの逃亡により、アイアリスの心はさらに荒み、その隙間につけ込んだ海の鬼灯と融合して、救いのない怪物を生み出してゆく。果たして、至福の島は復活するのか？ アイアリスシリーズ、完結編。

Chapter 1. 幻の黒馬（前書き）

アイアリスシリーズ第4部 完結編です。

Chapter 1. 幻の黒馬

（序）

” レインボーヘブン、それはこの世の富をすべて集めた至福の島。だが、500年もの昔、その島は突然、海に消えた。レインボーヘブンの守護神アイアリスは、その島を7つの欠片に分け、そして封印したのだ。遙か未来、住民たちの子孫にレインボーヘブンを返す約束を残して。

レインボーヘブンの伝説にはこう記されている。

—レインボーヘブンは再び蘇る。7つの欠片が集結し、その血を受継いだ住民たちが、その地を訪れた時に……また蘇る”

＊ ＊

— その漆黒の馬は、夜ごと夜ごとに天を駆け、邪心の紅に蔓延られた混沌の空を悉く、祓いのけてゆくという。

暗い嘶き^{いなき}を宙に轟かせ、鐙^{あぶみ}の下に深淵の闇を従えて —

＊ ＊

黒馬島の岸壁。

その突端で、ジャンは足元に広がる中海を見下ろし、苛立ちのこもった溜息をついた。

「あれから、もう1年が経つ。この島がゴットフリーの跡を追って、レインボーヘブンのあった場所に移動するっていうから、あんなに急いで、僕らはグラン・パールから黒馬島に移ったっていうのに、至福の島の復活どころか、ゴットフリーの行方でさえも、今だに分

からないままじゃないか！」

黒馬島は、自分の意志とは関係なしに移動を繰り返してきた流浪の島だ。確かに一昼夜をかけて、島は目的地にたどり着くことができたのだが……。

ジャンの声に、彼の背後の地面から黒銀の光が湧き上がってきた。鈍く輝くその光は、日に焼けた、短髪黒髪の少年の姿に変化する。

黒馬島のクロ。レインボーヘブンの7つの欠片のうちの1つ。だが、見た目には、ジャンと同じ15、6歳に思えるこの少年は、実体ではない。クロの正体は黒馬島そのものだ。それは、この島が、少年の姿に具現化した姿なのだから。

「……けどな、今、僕らが見下ろしている中海に……間違いなく、500年前に、レインボーヘブンが存在したんだ。ただ、今は、招かざる客が居座っているようだけど」

ジャンは、クロが指差した岸壁にとび色の瞳を向け、強く眉をしかめた。

火山岩の黒雲母と閃光石が交じり合った黒い岸壁。その袂から広がる夕暮れの海には、波間に射し込んだ西日が、鏡のように煌いている。だが、沖合いでは、澱んだ紅の灯が集結し、海の水を紅に染めていた。至福の島の復活を切に願う人々の想い。それを壊したくなる衝動を懸命に堪えながら、その邪心の灯は、襲撃の時をじっと伺っているかのように思えた。

「海の鬼灯……^{うみ ぼおずき}いつの間に、先回りしたのかは知らないが、あいつら、僕らがレインボーヘブンを復活させるのを何が何でも阻止するつもりで、ここに溜まっていやがるんだな」

ジャンの言葉に、クロは頷き、こう付け加えた。

「至福の島、レインボーヘブンは、その住民と、女神アイアリスによって分けられた7つの欠片が、この場所に集結した時に蘇る。けれども……集まった欠片はまだ6つ。しかも、アイアリスに囚えられた”レインボーヘブンの王”ゴットフリーの行方は分からぬままだ」

……しかし、海の鬼灯がそのまま、じつと波に浮んでいるはずがない。僕らが動き出す前に、奴らはきつと何かを仕掛けてくる。

ジャンは、きつい眼差しで沖に揺れる紅の灯を睨めつけてから、再び、深い息を吐いた。

それにしても、ゴットフリーは一体、どこで何をしているんだろう。彼が強く願いさえすれば、僕はいつの居場所をすぐにでも感じるができるっていうのに……。

Chapter 2

「隙ありすぎっ、1本取った!」

「おっと、そうはいくかつ」

夕日に照らされた黒馬島の海岸で、美麗なレイピアと、屈強な長剣が火花を散らした。

長剣の使い手、タルクは、寸でのところで受け止めたレイピアの一突きを、目にも止まらぬ早業で繰り出してきた少女に、呆れたように目を向けた。

おい、おい。いくらマン・ツー・マンで教えたからっていつて、たった1年で、普通、ここまで腕をあげるか。

思わず口から出そうになった賞賛の言葉をぐっと堪えて言う。

「まあ、最初よりかは、少しは上手くなったな……それより、お前、幾つになった? 少し背が伸びたんじゃないのか」

「13だよ。背が伸びるのはいいけど、タルクみたいな大入道になるのはご免!」

屈託なく笑う少女の紅の髪が、水平線に落ちてゆくオレンジ色の西日に、鮮やかに輝いている。

タルクは、その様に目を細めた。

サライ村のココ……か。

俺も相当、まいっちまってるのかな。この娘の髪を見るにつけ、さっぱり行方の知れない、あの男を思い出してしまうなんて。

陽光に晒されると黒から紅に変わる髪。
凍てつくような灰色の瞳。

「畜生っ、女神かなんかは知らないが、アイアリスに、ゴットフリーは何処へ連れて行かれちゃったんだよ！」

誰にとでもなく声を荒らげた巨漢に、少女が言う。

「そういえば、タルク、今、島でこんな噂があるのを知ってる？」
「噂？」

「黒馬島の御神体の黒馬が、夜な夜な空を駆けてゆくんだって。島の人は何人もそれを見ていて、でも、黒馬が現れるのは悪いことが起こる前ぶれなんだって」

「本当か?! 黒馬はゴットフリーの乗馬だ。もし、それが真実なら、あいつを探す手立てになるんだが」

悪いことが起こるって言われたって、ここの海には、いつ襲ってくるかわからない海の鬼灯が、びっしり待機してやがるし、これまでだって、島が沈んだり国が崩壊したり、今更、何が起ころうとも俺は慌てやしない。

それより、島で噂の黒馬が姿を現さないものかと、タルクは、宵の明星が輝き出した空にじっと目を凝らした。だが、そんな物が現れる様子はなく、空には渡り鳥たちが作る流線型の隊列が、北へと流れてゆくばかりだった。

＊

「そろそろ、黒馬亭に帰るか。フレアお婆さんが、夕食を作ってくてるだろうし」

「天喜あまきは？ 夕飯は今まで、あの娘が作ってくれてたんじゃなかったの」

ココの台詞に、タルクは、多少不満な顔をする。

「天喜はラピスの診療所だよ。最近じゃすっかり、奴の助手気取りだ」

夕日が消えた水平線が再び光を帯び、澱んだ紅の色が海から湧き上がってきたのは、その時だった。

一斉に、飛び立った海鳥たちの声が、甲高く空に響いている。異変を感じたココが、そちらへ目を向けてみると、

「タルク……これ、相当ヤバいんじゃない？」

海鳥の白い体が、邪心にまみれた紅に侵食されてゆく。不吉な運命を詰め合わせた紅の灯が、空の上で、集結し、形を整えだした。

巨大な翼と鉤爪。イヌ鷲に似た鋭い嘴くちばし

次の瞬間、鉤爪を向きだしにした怪鳥が、彼らの方へ急降下してきた。獲物に狙いを定めた紅の瞳が、鈍く光っている。

「逃げろ！！ 海の鬼灯うみのほおずきがとうとう攻撃を仕掛けてきかやった！！」

タルクは、ココを後ろに押しやると、背の鞘に、納めてあった長剣を大きく空に引き放った。

Chapter 3

振り上げた長剣は2メートル超。目前に迫ってきた怪鳥に向けて、それを一気に振り下ろす。瀑布のような剣圧に押しつぶされた紅の灯が、四方八方に飛び散った。が、それもつかの間、それらはぐりりと迂回し、再び鳥の姿に集結して、今度は後ろから攻撃を仕掛けてきた。

「タルク、後ろっ!!」

身を伏せながら叫んだココの声と同時に、巨漢の背中から鮮血が飛び散った。鋭い鉤爪につけられた傷に眉をしかめながら、タルクは、

「くそお……痛え」

「大丈夫?! でも、痛がってる場合じゃないみたいだよ!!」

少女が指差した薄暮の空。一旦、上へ昇った紅の鳥が、再び、こちらへ急降下してくる。

「畜生っ、毎度毎度、しつこい奴らめ!」

斬られても、押しつぶされても、海の鬼灯ってやつは、何処からともなく、湧き上がってきやがるんだ。

ちっと舌をならしながら、タルクが、もう1度、長剣を掲げ上げようとした時、

「ちょっと待って! 次は私がやってみるっ」

傷の痛みに顔をしかめた大男をちらと見やってから、我慢してつと声をかけると、ココは、タルクの膝を踏み台に、その腕から肩へと一気に登りつめた。そして、空へ高く飛び跳ねたのだ。鋭い眼差しで捕えた敵の急所に、至極の宝剣”レイピア”を疾風のごとく突

き立てながら。

瞬間、紅の怪鳥が、空で粉々に飛び散った。それらが完全に消滅するのと、少女が地面に着地したのとは、ほぼ同時のことだった。

「ふふん。やっぱり、紅の色が一番、気色悪い所が急所なんだ」

見切ったとばかりに不敵な笑みを浮かべ、すっと立ち上がると、手にしたレイピアを一振りしてから鞘におさめる。その仕草に、

「おい、おい、すげえな。海の鬼灯の弱点を見極めるなんて……ゴツトフリーと一緒にいて、あいつを真似てるうちに、そんなことまで覚えちゃったのか」

「へ？ 真似てる……て、私が？」

「何言ってるやがる。今のキメ方なんて、そっくり……」

だが、タルクが、その言葉を言い終えないうちに、西の空が、突然、翳ろいだした。宵の明星は光を奪い取られ、風が運んできた灰色の雲が見る見るうちに、空全体に広がってゆく。すると、波音までが、しんと成りを潜めてしまったのだ。

光という光、音という音が黒馬島の海岸から消えてしまったかのような……

完全な沈黙。

「な、何……？」

タルクとココは顔を見合わせ、それから、ふと、遠くに耳を澄ませた。

かすかに響いてくる蹄の音と、暗い嘶き。

そして、彼らは、啞然と空の一角に視線を移した。

「黒馬が……」

黒衣の男を背に乗せた漆黒の馬が、
闇を従え、黒馬島の空を駆け抜けてゆく。

「ゴットフリーー!!!」

タルクは、堪らず空に向かって、その名をあらん限りの大声で叫んでしまった。冗談じゃない。1年間も姿をくらませといて、久々に現れた姿は、幻か!?

けれども、灰色の雲の中を疾走してゆく黒馬の姿は、どう考えてみても、現実のものとは思えなかった。そして、なす術が見つからず、二人が空を見上げているうちに、黒馬は闇に溶け込むように姿を消してしまった。

だが、

「タルクっ、あれっ、あれ見て!」

ココが指差したはるか彼方に、その跡を追うように、巨大な漆黒の鳥が飛翔してゆく。

伐折羅の黒い鳥。

その羽ばたく翼の影に、少年の姿が見える。

「タルクっ、あれって伐折羅はせらの……伐折羅の黒い鳥じゃないの?!
なら、あの鳥の上にいる子が夜叉王?」

レインボーヘブンの欠片“空”。その鳥は知っていても、その主、夜叉王“伐折羅”の姿を目にしたのは、ココにとっては初めてのことであったのだ。

「伐折羅って、黒馬島の夜の守り手なんでしょ?! 私、あの鳥の跡を追ってみる。あの子、ゴットフリーのことをきっと何か知ってるわ。だって、あの幻の黒馬に着いてゆこうとしてるんだもん」

「冗談じゃない! 追いかけるって言ったって、もう、夜だぞ。危なっかしいことを言い出すのは止めて、さっさと黒馬亭に帰るんだ」
「大丈夫! 私、足には自信があるし、すぐに追いついてみせるよ。それに、伐折羅の黒い鳥とは、仲良しになりかけてるんだ。おまけに、伐折羅って天喜の双子の弟なんですよ。なら、そんな悪い子じゃないよ。タルクは背中が痛いんだから、先に黒馬亭に帰ってて!」
「お、おいっ、待てよ!!!」

止める間もなく、紅の髪をした少女は、全速力で駆けて行ってしまった。その後姿を啞然と目で追いながら、

「あの娘がゴットフリーに似てるだなんて、ちょっとでも思っちまったことを俺は早々に撤回するよ」

タルクは、ふうとため息をつき、

「無鉄砲なところは、ゴットフリーに似ても似つかないじゃないか」
仕方ないかと、ココを行かせてしまったことを天喜に叱られるのを覚悟して、黒馬亭への道を帰ってゆくのだった。

Chapter 4

「じゃ、ラピス、また来るわねっ。お世話さま」

「出した薬、飲んでれば直る風邪。また、来られてもなあ。あ、でも、時間外なら構わないけど」

涼しげな笑みを浮かべて手を振る青年に、思い切り気のある様子で、島の娘が診療所を出て行く。

金の短髪に袖まくりのシャツ。破れたGパン。その風体とは関係なしに、1年前に突然、島に乗り込んできた、この青年が町はずれに臨時の診療所を構えた時、住民たちの誰も彼もが眉をひそめた。

目が見えないのに医者のお卵？　いくらこの島に医者がいないっていったって、それはなあ……。

けれども、それは杞憂に終わる。

外海から来たラピスという青年は、盲目なのに人を診る。それもえらく腕がいい。

おまけに、妙に女の子に人気があるそうだ。

そんな噂が、島中にいつの間にか流れてしまっていた。

＊

「こっちは忙しいのに、相変わらず、女の子が、やれ擦りむいたとか、頭痛がするとか、たいした用事もないのにやってくるのね」

閉口した様子で、薬の調合に使った道具を片付けているのは、彼の助手を務めている天喜^{あまぎ}だった。

「まあ、大目に見てやれよ。あの娘たちだって、邪魔にならないように、暇そうな時を見計らって、やって来るんだから」

「そりゃあ、ラピスがそう思うならそれでもいいけど……暇な時に押しかけられてちゃ、あなたが、休む時間がちっともないじゃない」
そんな天喜に、ラピスは、

「天喜みたいな美人だったら、何人、押しかけてこられたって、いつでも、大歓迎なんだけどな」

「そんな上手いこと言っちゃって、乗せられないわよ。ラピスは、誰にだってそう言うんだから」

はにかむように微笑んだ白桃の色合いをした頬。琥珀色の瞳。そして、薄い褐色の巻毛が背中揺れる度、辺りの空気を華やかな香りに染めてゆく。

ラピスは、小さく微笑む。見えなくたって、心で感じる。レインボーヘブンの欠片“空”。この娘からは、その血を二つに分けて受け継いだ、夜明けの清廉な光が溢れてる。

……と、その時、診療所の扉が大きく開かれ、頬に傷のある男が中に入ってきた。男は机の前に座った医者のおと、傍に立つその助手にじろりと目を向けると、

「おい、そこ、二人でいい雰囲気になってる場合じゃねえ。新しく作った弓部隊の編成表が出来たんだ。明日からさっそく訓練に入るから、ラピスには、それに目を通してもらわないと」

「弓部隊？ ラピスってそんなことにも手を貸してるの？」

「当たり前じゃないか、こいつほどの弓の名手は、ちょっとやそつとじゃ、見つかりやしない」

傷の男 ― ラガー ― の台詞に盲目の青年はまんざらでもない顔をした。とは言っても、ラガーだって、知能にかけては右にでる者がいないほどの切れ者なのだけれど。そんな彼が、ラピスの耳の傍でこそりと囁いてきた。

「お前な、あからさまに天喜といちゃつくのは辞めろ。ちっとは、タルクに気を使えよ」

「いちゃつくって……何だよ、それ？」

「お前、女の子には不自由してないだろ。人の“想い人”まで取るな」

「馬っ鹿じゃねえの。取られなくなったら、もっと、しっかり掴まえておきいいんだ。それに、俺は天喜に手を出した覚えはない……」

診療所の扉が再び、大きく開かれたのは、その時だった。

「その手！ 一体、どうしたの？！」

血にまみれた腕を押さえながら、少女が扉の前に立っていた。床にしたたる鮮紅色に、驚いて、天喜が駆け寄ってゆく。見たことのない顔。黒馬島の住民ならば、知らぬ顔はいないけれど、外海から来たサライ村の住民なのかもしれないと、急いで彼女の手を取ると、

「紅の灯が……」

「紅の灯？！ もしかして、海の鬼灯にやられたの？！」

ラピスはその瞬間に、全身が総毛立つような感覚を覚えてしまった。目にも止まらぬ速さで、いつも近くに置いてある弓矢に手を伸ばす。そして、

「天喜、退け！！」

その声が終わらぬうちに、銀の糸を弾いたような弓矢が、少女に向けて飛んでいった。

敵を玉碎した弓矢が、扉に深く突き刺さる。天喜が握った手元から、濁った紅の光に包まれた少女の体が、音もなく崩れてゆく。

「な、何っ、何……？」

鋭い刃で切られたような痛みに、顔をしかめたとたん、天喜の手から、鮮血が流れ落ちた。

手を切られた？ あんな短い一瞬に？

浅い傷ではないと思った。見る見るうちに足元に広がってゆく血だまりに、気が遠くなってしまういそうな気分になる。

ぺたんと床にへたりこみ、啞然と視線を向けてくる天喜に、ラピスは、弓矢を下ろして、慌てて駆け寄っていった。

Chapter 5

「大丈夫か?! 今、止血してやるから、少しの間、我慢して」

生暖かい感触が止め処なく少女の手から溢れ出る。ラピスは、その細い手首を片手で握り締め、もう片方の手をその上に添える。

「あの紅の灯は、かまいたちみたいに、人を切り刻む邪気なんだ。しかし、あんな風に女の子になりすまして町にやって来るなんて、思ってもみなかった。これって、すごくヤバくないか」

「海の鬼灯って、まさか、今の少女が……」

ふらりと倒れそうになった天喜を支えながら、こくりと頷いたラピスを見据えて、治療に必要な道具を運んできたラガーが言った。

「まいったな。こんな風にケガ人を増やされると、やっかいなことになる。これからは、島の女の子がどんなに文句を言ったって、診療所は天喜に任せて、ラピスには弓部隊の訓練に専念してもらおうって思っていた矢先なのに……」

「ジャンとタルクは？」

「奴らに、弓は扱えないだろ。それに、彼らは彼らの持ち場で手いっぱいなんだ」

まあなと呟きながら、ラピスは握りしめていた天喜の手首から手を離して、ほっと笑みを浮かべた。

「良かった。出血のわりには傷は深くなかったみたいだ。もう、塞がりかけてる」

「え……?」

そういえば、いつの間にか痛みまで消えてる。けど……そんなことって……

診療所の扉が再び大きく開け放たれたのは、“絶対、あるはずない”と、天喜がラピスに訴えかけようとした瞬間だった。

大きな背中を丸めながら、中に入ってきた男は、床に広がった血だまりと、床に座り込んでしまっている少女に目を向け、

「天喜?! まさか、お前も海の鬼灯にやられたんじゃないだろうな?!」

焦った顔で近づいてきた巨漢に、ラピスが言う。

「天喜の傷は深くないけど、お前もって、タルク、お前もか?……で、ココは? あいつも一緒にいたんじゃないのか」

「いや……止めたんだが……あの娘は伐折羅の黒い鳥を追って、走っていつちまった。どこへいったかはちよつと……」

口をもごもごさせて、天喜の方へ目を向ける。すると、案の定、「何でタルクがついてて、こんな物騒な夜に女の子を一人にするのよ! 伐折羅の黒い鳥を追っていったなら、あの子の行った先は西の山に決ってる。あの山は、伐折羅の手下の西の盗賊がたむろする場所なのは知ってるでしょ。一刻も早く、あの娘を連れ戻して! いくら伐折羅が仕切っているからっていったって、気に入らなきゃ、女の子だって、弟は容赦なく闇に葬ってしまうわよ!」

伐折羅は黒馬島の夜の守り手。双子の姉の天喜と、レインボーヘブンの欠片“空”の“夜”と“昼”の部分を分け合った、闇の戦士の主。殺戮と崩壊を好む夜叉王。

そう……伐折羅は、あんなに慕っていたゴットフリーの胸を鋭いナイフで刺したこともあったのだ。天喜の弟だと思って警戒していなかったが、これはもしかしたら、海の鬼灯よりも危険なのかも。タルクの脳裏に嫌な思いがよぎってゆく。

あの少年は、守りたい気持ちと、壊したい気持ちを心に共有している。その制御ができなくなった時、伐折羅は夜叉王としての本性を表にさらけ出す。

「西の山へ行つて来る」

タルクが、その言葉を言い終わらぬうちに、

「天喜は、ラガーと一緒にここで休んでろ。タルク、早くっ！ お前の治療は後だ。そんな傷くらい気合で直せるだろ！」

大男を手で誘い、弓を手に携えたラピスが、診療所の外へ飛び出していった。

Chapter 6

闇が宵の空を群青に染めてゆく。夜の天幕を水面に映す海が、空の影のように静かな波をたてている。互いの色に溶け込む空と海。けれども、夜を迎える黒馬島の景色の中で、水平線に並ぶ紅の灯だけが、不自然に澱んだ光を蠢かせていた。

冷たい風が彼方に波音を運んでゆく。

その風を追いかけながら、紅の髪をなびかせた少女が、海岸線を駆けていった。

「駄目。やっぱり早くて、追いつけない」

ココが、息をきらして空を見上げると、追いつくどころか、伐折羅の黒い鳥は、前方に聳え立つ黒い山を旋回しながら上昇し、暗い雲に隠された頂の中へ姿を消してしまった。

どうしよう。あれって、西の山だね。黒馬島の盗賊が根城にしてるっていう。

戸惑って、山の方に視線を向ける。すると、登山道に添って立てられた松明の灯が目映ってきた。

「松明の道があるってことは……あれを登ってゆけば、伐折羅に会えるってこと？」

黒い鳥に乗った夜叉王とかいう少年は、西の山の盗賊の長なのだと島の住民が言っていた。彼に会えば、夜な夜な空を駆けてゆく幻の黒馬の行方を知る手がかりをつかめるはずなのだ。

すると、萎えていた気持ちが一足飛びに、山の上へ行きたい気分になり替わってしまったのだ。はぜる松明の灯が上へおいでと誘っ

ているような気がして、ココは登山道を足早に進んでいった。多少の闇は平気だった。ただ、ふと、遠くから響く夜鳥の不気味な声に耳を澄ませると、

やっぱり……タルクと一緒に帰った方が良かったかも。

ココは、一人でこんな山の中にいることが、急に怖くなってしまったのだ。すると、じわりと涙が目には浮かび上がってきた。

私って、本当に馬鹿。こんな場所で野宿とかになったら、どうするつもりなのよ。

木々の間から黒い影が飛び出してきたのはその時だった。

「お前っ、一体、ここへ何しに来た!」

きょとんと瞬きしてみると、いかつい顔つきの数人の男が、目の前に立ちふさがっている。

「あの……もしかして、この山の盗賊?」

「だったら、どうしたっ!」

泣きべそをかいていた少女の顔が、ぱっと明るくなる。

「良かったあ!」

満面の笑みを自分たちに向けてきた少女に、盗賊たちは解せない顔をする。

「良かっただど? お前、頭が弱いのか。俺たちは、この山を根城にしている盗賊なんだぞ」

「だって、一人で心細かったし、それに、私だってガルフ島じゃ“サライ村の泥棒娘”って名を馳せてたんから、盗賊なんてお仲間みたいなもの。分ったら、とっとと伐折羅の所へ案内して。その子って、あんたたちのボスなんでしょ」

「お頭に会わせろだって?! ふざけるな!! お前、誰に物を言

っているんだ!」

血の気が多い盗賊は、かっと激昂して腰のダガーナイフを少女に向けて振りかざす。

ところが、ひらりと体を翻すと腰の剣を引き抜き、ココはほんの一瞬の隙について、彼の足元に入り込んできた。

「何っ!?!」

レイピアの銀の光る切っ先が、真下から盗賊の咽喉元を狙っている。

「私は本気。言うことを聞いてくれないのなら、このレイピアで串刺しにしちゃうんだから」

にこりと不敵な笑みを浮かべる少女に、盗賊たちは、ただ、啞然と目を向けるばかりだった。

反撃しようにも、どうにも手が出せない。荒くれた海賊や敵の盗賊相手なら言い訳もたつが、小娘一人に殺られただなんて、伐折羅の耳に入りでもしたら、ただで済むはずがない。ここは何とか穏便にと、盗賊たちは猫なで声で、

「あのな……お嬢ちゃん、いい子だから、そんな物騒な剣はしまっときな」

「なら、伐折羅に会わせてよ!」

「いや……、お頭は俺たちだって、好きに会えるわけじゃないから……」

「あっ、そう。なら、こうするけど」

ココは、人質にした盗賊の咽喉元に、颯爽とレイピアを突き上げようとする。慌てる一同を小気味良さ気にぐるりと見渡す。……が、顔を蒼白にして、潮が引いたように後ずさってゆく彼らの姿に、

「何……?」

その瞬間、ぞくりとした感触が足元が沸きあがってきた。ぼおとほら貝を吹いたような空洞な音。突然、目の前に現れた暗く冷たい殺気に、堪らず、盗賊たちが叫んだ。

「お、お前がいらぬ面倒を起こすから闇の戦士が降臨してきやがった。死にたくなけりや、早く、そのレイピアをしまえ!!　こいつら、敵も味方も容赦ないぞ」

闇の戦士……それって、伐折羅の配下の?!

ココの脳裏に、紅の邪気と合間見えて、グラン・パープル島で崩壊の限りをつくした闇の姿が浮かび上がってきた。グランパス王国は、その紅と闇の戦いに巻き込まれて滅亡したのだ。すべての敵を闇に引きずり込む、夜叉王、伐折羅の闇の軍。……が、時にはぞつとするほど殺気を帯びた人型の殺戮者。ただ、あの時は、住民たちが皆殺しになる前に、“闇の王”ゴットフリーと共に、彼らは光のない世界へ堕ちていったのだ。

暗黒の鎧をまとった人型の戦士は、姿を現したとたんに、手にした長槍を彼らに向けて振り下ろしてきた。

「わああああ!!」

盗賊が叫ぶ。けれども、

「慌てないで!　こいつの弱点も見切ったわ」

ココは、咄嗟にレイピアを闇が色濃くひしめく箇所をめがけて突きたてた。ぼおつと断末魔の声をあげて、黒い靄が飛散する。激しく息をきらしながらも、一向にひるむ様子のない少女を見据えて、

「お前……一体、何者だ?」

盗賊は驚愕の瞳をレイピアの使い手に向けた。けれどもその場で、ココは胸を抑え、膝について激しく咳き込み出した。闇が体の中に入り込んでくる。人型を崩された闇の戦士が、今度は靄になって内

側から攻撃をしかけてきたのだ。

「駄目だ、苦しい……」

堪えることができず、レイピアを下に落とした時、

「止めろ。お前ら、何を騒いでる」

上空の雲の中を縫うように黒い風が舞い降りてきた。

伐折羅の黒い鳥。

その巨大な漆黒の鳥の背から、一人の少年が地上に降り立った瞬間に、禍々しい闇の気配は夜に紛れて消えうせてしまった。

「お頭……！」

口々にその声をあげ、周りに集まってくる盗賊たちに、その少年は目もくれない。

この子が、夜叉王、伐折羅……。

夜が化身したかと思うほどの漆黒の髪と瞳。髪や瞳の色は違っても双子の姉の天喜と同じ顔、同じ背格好。……が、伐折羅には、天喜のような華やいだ感はあるでなかった。ただ、つややかな黒髪が風になびく様や、深く澄んだ漆黒の瞳は、静かな夜の湖底のように寂しく、また美しく、人の心に深く憧憬の念を起こさせた。

陽と陰、天喜と伐折羅にはその言葉がよく似合った。

冷涼な黒い瞳を自分に向けてくる少年の姿に、ココは立ち上がることも忘れて見入ってしまった。

Chapter 7

「も、申し訳ありませんっ。この娘がどうしてもお頭に会わせろって、レイピアを振り回すもんですから」

「ふうん……で、この子、一人に脅されて、太刀打ちも出来なかったってわけ」

「こ、子供と思って油断してたもんで……」

盗賊たちの声は酷く震えていた。ココは、そんな彼らの態度に腑に落ちない顔をした。レイピアを鞘におさめ、再び、巨大な黒い鳥の前に立つ少年に目を向ける。

この子が夜叉王？ もっと怖々しい姿をしてるかと思ってたら、全然、イメージが違うじゃん。

けれども、彼の深い夜色の瞳に見つめられると、隠しておきたい心の奥の秘密までもが、具に解き明かされてしまいそうな気がする。ココは、危なげな雰囲気飲み込まれまいと、わざと空威張りな声を出した。

「あ、あんたが、伐折羅？　ちょうど良かったわ。ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「僕をあんた呼ばわりするなんて、随分、勇気のある奴だな」

夜を一層、深めてしまいそうな冷ややかな声音。

「お前、外海から来た連中の一人なんだろう。いくらよそ者だからといって、この西の山に勝手に入り込んで、生きて帰れるとも思っているのか」

「そ、そんな風に、脅そうとしたって駄目！　何よ、あんたなんか

より、ゴットフリーの方がずっと迫力があるんだから。あの凍りついた灰色の瞳にだって、私は怖気づいたりしなかったんだから」

「ゴットフリー？ お前、彼を知ってるのか」

複雑な思いの籠った漆黒の瞳が、少女をきりと見据える。

「知ってるも何も……」

その時、ココは、はたと口を閉ざした。“その先は、まだ誰にも言うな”と、ジャンに口止めされていたことを思い出してしまったのだ。けれども、伐折羅が訝しげな目を向けてくる。焦ったココは、「えっと、あの……お友達っ！ そう、私とゴットフリーはお友達なのっ」

「お友達？」

そう言ったとたんに、伐折羅は堰を切ったように笑い出した。

「馬鹿なことを。お前みたいな小娘とゴットフリーが友達だって？

！ それに、“友達”なんていうのは、あの人が一番似つかわしくない言葉だ」

「あっちがどう思ってたって、私はそう思ってるの。それに、あなたの姉さんの天喜とは真正正銘の友達だし、タルクは私の剣の師匠なんだからっ」

「天喜と？ それにタルクが師匠だって？」

その名を耳にしたとたんに、棘々しかった伐折羅の表情が少し変わったような気がして、ココはここぞとばかりに言葉を続けた。

「そうなの。実は、私、今はラピスとタルクと一緒に黒馬亭に住まわせてもらってるのよ。黒馬亭って、あなたの実家なんですよ。

そこで、天喜のお手伝いをしたり、タルクに剣を習ったり、色々と忙しいくって……で、こんな風に」

その瞬間、ココは表情を引き締め、腰の鞘からレイピアを素早く

引き抜くと、鋭い切っ先を伐折羅の咽喉元めがけて突き上げていった。びくりと後ずさった少年の寸でのところで剣を止める。そして、標的ばてきの身動きが出来なくなった様子を見定めて、不敵な笑みを浮かべて言った。

「とっても剣の腕が上がったわけ。さあ、このまま咽喉を突かれたくなかったら、さっさと、ゴットフリーの行方を教えなさいよ！あんたが、“幻の黒馬”を伐折羅の黒い鳥に乗って追いかけていったのを私は、見てたんですからね。だから、知らないなんて、嘘を言っても無駄！」

とたんに、ざわと遠巻きに様子を見ていた盗賊どもが蠢きだした。だが、伐折羅は小気味良さげに口元で笑うと、冷涼な視線を下に落とし、それを自分の咽喉元にあてがわれた鋭い剣の切っ先に向けた。

レイピア……この剣は、間違いなく、グランパス王国の王女、スウォード・リリーが、ゴットフリーに託した至極の宝剣。

「なるほど、聞きたいことがあるっていうのは、ゴットフリーが乗った黒馬の行方か。けれど、お前に咽喉を串刺しにされる前に、僕の方からも1つ、質問させろよ」

「え？」

「その宝剣は、生きながら水晶の棺に入り、グランパス王国の守護神となった王女が、ゴットフリーに託した剣だ。何でお前がそれを持っている？」

「何でって、言ったって……ゴットフリーがお前が持っていた方がいいって、渡してくれたから……」

その先のことは、ココにも分からなかった。だが、その剣の柄は、まるで自分にあつらえたかのように、握ると妙にしっかりと手の中に納まるのだ。タルクには、“ゴットフリーに暗示をかけられたせ

いだ。あいつは、たまにそういうことをやるから”と、軽く受け流されてしまったのだが……。

ふうんと、伐折羅は、肩膝について勇猛に剣を構える少女を下目線に眺める。

「お前って面白い奴だな。本気で黒馬の行方を知る気があるのなら、僕についてくるか。ただし、伐折羅の黒い鳥に乗れたらの話だけど」
そう言ったとたん、鋭いレイピアの切っ先など無いもののように、くるりと背を向けた少年。ココは慌てて、

「待ってよ！ そんな風に敵に背中を向けるなんて、後ろから刺されてもいいってことっ？！」

けれども、自分の足元が暗い靄に覆われていることを知った時、ココは、たとえ、レイピアのどんな手練れた使い手であっても、全ての脅しや抵抗は、この西の山では通用しないことを悟ってしまった。

闇の戦士。

灰色の靄が足元から膝へ這い上ってくる。それが、伐折羅からの攻撃の命を待ちわびるかのように、暗い熱気を放っている。彼らの主――夜叉王、伐折羅――に一太刀でも向けようものなら、多分、敵の体はこの戦士たちに闇の世界に引きづられていってしまうのだろう。

やっと分かった。盗賊たちが、伐折羅をあんなに恐れた理由^{わけ}が。

「何をしてるんだ。さっさとそんな剣は鞘にしまって、こちらへ来ないと、”伐折羅の黒い鳥”の気が変わってしまうよ。こいつは気難しいんだ。僕が一緒であっても、気に入らなきゃ、絶対に、背に

他の人は乗せない」

大冷や汗をかきながら、闇の戦士を足元から払いのけるココの方を振り向き、伐折羅は人の悪い笑みを浮かべて言った。

「それとも、都合よく、この場で、闇に堕ちていってしまおうか？

黒馬は”闇の王”（ゴットフリー）の乗馬だ。もしかしたら、お前の探している”幻の黒馬”は、この世にはいないかもしれないのだから」

Chapter 8

不透明水彩の藍を広げたような色の空。その中ほどに透明水彩の白と黒を混ぜ合わせた灰色の雲が、薄く帯をひいてゆく。深まる夜の時間とともに、今、出来たばかりの雲は風に吹かれ、切れ切れに遠くへ流されて、生まれては消えるを繰り返している。

そんな日没後の黒馬島の天の全景を流れてゆく雲の軌跡を追いかけて、漆黒の翼を広げた巨大な鳥が滑空していった。

鳥の背には、鳥の翼の影のような容姿の少年と、それと対照的な明るい紅色の髪の少女が乗り込んでいた。月と星の輝きは、雲の絶え間ないカーテンに遮られ、光はその切れ間から断片的に見えるだけだ。

凶報の予感がひしひしと伝わってくる夜空の気配に、伐折羅は満足げに笑みを浮かべた。殺戮と崩壊は、百億の夜叉の主である彼にとってが一番の癒しなのだ。けれども、手前に陣取った少女に訝しげに目をやり、

“伐折羅の黒い鳥”は、滅多に”僕”以外を背に乗せることはない。それが、こんなにすんなりと、ただの娘を受け入れてしまうなんて……しかも、

「伐折羅の黒い鳥が、乗せてくれて本当に良かったあ。天喜の白い鳥とは仲良しなんだけど、ちょっぴり心配だったんだよね」

「仲良し？ お前、天喜の白い鳥に乗ったことがあるのか」

「お前じゃなくて、ココ！ 私の名前は“サライ村のココ”。天喜の白い鳥には、エターナル城の迷宮をゴットフリーと攻略して、その後に初めて乗ったの。あの時は、ゴットフリーに無理矢理に鳥の背に乗せられて、お城の尖塔の上に一人にされて、どうなるかと思

ったけどね」

けろりと笑い声をあげる少女に、伐折羅は不本意ながらも小さく頷いた。しかし、どう考えてみても、この少女とゴットフリーとの繋がりが分らない。その時、雲の隙間から届いた月明りに、ココの紅い髪がきらりと輝いた。

ゴットフリーの髪は、陽光に照らされると黒から紅に変わる。

ところが、その想いを伐折羅が反芻する前に、二人が乗った黒い鳥は、蔓延っていた雲が、まったく見えない箇所そらに入り込んでいったのだ。

「上昇しろ！」

黒い鳥が雲の隙間を突っ切って、高く高度をあげたのは、伐折羅がそう命じた瞬間だった。

＊ ＊

脇を通り抜けてゆく、星の大群。矢のように降り注いでくる夥おびただしい数の流れ星。ココは、その光景に目を瞬かせた。

にしても、この数は多すぎる！！

自分たちを乗せた伐折羅の黒い鳥を貫いて落ちてきそうな大量の流れ星に、ココは度肝を抜かれ、美しさよりも恐怖を感じてしまった。背中で伐折羅が小さく笑い声をたてている。

これが、夜叉王、伐折羅が治める“黒馬島の夜”？

「何を小さく縮こまっているんだよ。幻の黒馬の行方を知りたくて、

ここまでやって来たにしては、度胸がないんだな」

伐折羅は、ココをからかうように水平飛行に変えさせた黒い鳥をさらに前へ飛翔させた。そうしながら、彼が指差した遠くの空には、星の姿は1つもなく、そこには大量の紅の灯が蔓延っていた。

「あ、あれは海の鬼灯!!」

「そうさ。あの先には星は1つも見えないだろ。なぜだと思う？」

紅の邪気にすべて飲み込まれてしまったんだ。放っておけば、あの紅の灯は間違はなく、黒馬島全部を食い荒らしてしまうだろう。面白いと思わないか？ それにも気づかずに住民たちは、毎日を安穩に暮らしてるんだ」

「別に面白くなんかないわ」

強い口調で言い返したものの、続々と集結してくる紅の灯を見ているうちに、ココは背筋が寒くなってきた。もし、本当にあの邪気が黒馬島を襲ってきたら？

「だから、伐折羅は、黒馬島の夜を守ってくれてるんでしょ？ そうでしょ？ そうだよな。だって、あんたは百億の夜叉を率いた夜叉王なんだから」

伐折羅は、微妙な表情で言葉を続ける。

「まあ、もう少し、見ておいで。もっと、面白い物が見れるから」
「……」

それっきり口を噤み、息をひそめた少年に、ココの心臓はいやがおうなしに鼓動を早めていった。伐折羅の黒い鳥は、その場所で羽ばたくのを止め、風に乗りながら時を経つのを待っている。

「あの……」

沈黙の時間に耐え切れず、ココが口を開こうとすると、

「しっ!」

伐折羅はココの口元を後ろから塞ぎ、そのまま、黒い鳥の上に突

っ伏した。すると、瞬間に、彼らの真横の空間が大きく十文字に引き裂かれたのだ。

突風が吹きつけてくる。何処か遠くから、蹄の音が響いてくる。

「ま、ま、まさか、これって……?!」

黒い影が、空間の裂け目から飛び出してきた時、ココは、突風に吹き飛ばされまいと黒い鳥の背に遮二無二にしがみついた。それから、大きく目を見開いた。

影のような、闇のような……巨大な黒馬が、暗い風を引き連れながら空を駆けてゆく。

その背に乗った黒装束の男に視線を向けた瞬間、

「ゴットフリー!!!」

風に吹き飛ばされるのも厭わずに、紅の髪の少女は、伐折羅の黒い鳥から身を乗り出し、渾身の想いを込めてその名を呼んだ。

Chapter 9

「伐折羅っ、追いかけて！ あの黒馬を追いかけてっ！！」

けれども、巨大な黒い鳥の背から身を乗り出した少女の依頼を、漆黒の瞳の少年は即座に拒絶した。

「無理だよ。理由は、あれを見れば分かる」

降り注いでくる大量の流れ星を蹴散らしながら、黒装束の男ゴットフリーを乗せた黒馬が、紅の邪気――海の鬼灯――が作り出した空のエリアに駆け込んでゆく。黒馬島のその位置にあるすべての星々を飲み込んでしまった紅の澱み。だが、黒馬が足を踏み入れたとたんに、黒馬の背後に集結しだした黒い靄が、一気に紅の灯を食い荒らしていた。

跡に残るのは、暗くて深い空洞の闇。

それは、近づく者を容赦なく引きずり込むブラックホールのように渦を巻きながら、勢力を拡大してゆくのだ。

「あ、あれは……あの紅を全部消してしまったのは……まさか、闇の戦士？」

ココは、目前で繰り広げられた侵食の凄まじさに、ただ、震えるばかりだった。けれども、ふと気づいたように、後ろを振り返ると、

「夜叉王、伐折羅！ 闇の戦士って、あんたの配下なんですよ？」

それなのに、どうして、近づくことができないのよ」

「僕は、この場所を離れるわけにはゆかない」

「何で?!」

「こんな壮絶な闇と紅の戦いが、毎夜、毎夜、繰り返されているんだ。それを幻の黒馬に乗ったゴットフリーが指揮しているのは見ての通りだよ。けれども、彼らは、暴徒となった”闇の戦士”を残し

たまま、いつも不意に消えてしまうんだ。配下といっても、”闇の戦士”は敵も味方も容赦なく闇に葬る烏合の衆だ。放っておけば、あの黒い靄は”紅の灯”だけでは飽き足らず、黒馬島にまで押し寄せてくる。僕は、黒馬島の夜の守り手として、この場所で、何としても彼らをせき止め、統率せねばならないのさ」

「そんな……」

ところが、ココが納得のゆかない顔を伐折羅に向けた時、

突然、前方の空間が再び裂けて、幻の黒馬が彼らの横を通り過ぎていったのだ。

「ゴットフリーー!!」

頬をなぞてくる冷氣。ココは、それが流れてくる方向に視線を向けた。そのとたん、幻の黒馬に乗ったゴットフリーの風貌に背筋がぞくりと寒くなった。

額から頬に流れる血の間から、鋭利な刃物のような灰色の瞳がきらりと輝いている。首筋、腕……そして、彼の右胸からも見るに忍びないほどの鮮血が迸^{ほとばし}っていた。

どうして!?! 何で、ゴットフリーは、あんなに傷ついているの？

目前に見た彼の姿が信じられず、ココは、

「待って! ゴットフリー、こっちを向いて!!」

「無駄だ! 何を言っても、彼には聞こえない。幻なんだ。あれはゴットフリーの実体じゃない!!」

……が、

「……」

ココと伐折羅は、その瞬間、体が凍りついたように口を閉ざした。ほんの一瞬、鎧を踏みしめ、黒馬の歩を止めると、騎乗の黒衣の男が二人の方を振り向いたのだ。

「ゴットフリー……」

だが、伐折羅の黒い鳥が、大きく翼を羽ばたかせたように、

黒馬は空間のひずみに姿を消してしまった。

やっぱり、あれは幻……。

ココは、その時、伐折羅の言葉の意味がようやく理解できたような気がした。

「……あの胸の傷は、ゴットフリーの古傷だね。私、エターナル城の迷宮で同じものを見たことがあるよ。でも、今日、見た傷は、あの時よりももっと酷かった。もし、あれが本当なら、私はゴットフリーが心配でたまらない」

当惑したココの言葉。

”ゴットフリーの右胸の傷”

それを聞くにつれ、伐折羅は沈痛な思いに胸を苛まれた。ふつとりと口を閉ざしてしまった少年の態度。すると、その時、

「待ってよ……確か、あの傷って、伐折羅、あんたがつけたんじゃない……」

エターナル城の迷宮で、どちらかを選ばなければならなかった二つの扉。その間違った一方の扉を選ぼうとした時、ゴットフリーの胸の傷が酷く痛んだことをココは思い出したのだ。

「”死にたくなければ近づくな”それが、夜叉王からの警告だ。……って、ゴットフリーは言ってた。けど、あの時の傷の痛み様は尋常じゃなかった。警告するにしても、何で、あんたは彼にあんな酷い傷をつけたのよ!」

— 忘れられなくなかった……闇の住民である僕の居場所を必ず見つけてくれると、ゴットフリーは言った。あの傷はその約束の印

なんだ。――

だが、伐折羅はココの質問には何も答えず、
「そんなつまらない話をしている暇はないんだよ。」闇の戦士”が
暴走して、黒馬島へなだれ込んでゆく前に、猛り狂った奴らを封じ
込めるぞ。”死にたくなければ、黙って黒い鳥にしがみついてろ”
それが、今、僕からお前に言える最大級の警告だ」

殺意の衣を羽織って巨大に膨れ上がった”闇の戦士”が、漆黒の
靄となって目前に迫ってくる。紅も闇も黒馬島も無差別に飲み込ん
でしまいそうな狂った破壊者たち。

「怖い。何で、ゴットフリーはあんなのを置いたままで消えちゃっ
たのよ……」

どうしようもない恐怖にココは身を震わせて、黒い鳥の首に身を
伏せる。そして、伐折羅は、その様が面白くてたまらないように、
透き通った笑みを頬に浮かべた。

Chapter 10

渦を巻きながら暴走する闇が迫ってくる。けれども、”夜叉王”
伐折羅は巨大な黒い鳥の背に身を起こしたまま、涼しげにその様子
を見つめているだけなのだ。

「伐折羅……黙ってないで何とかして。頼れるのはあんなだけしか
いないんだから」

すると、ココの弱音をあざ笑うかのように、伐折羅の黒い鳥が、突
然、かん高い鳴き声をあげたのだ。そして、驚く少女を尻目に、巨
大な翼を空に羽ばたかせた。

飛び散る墨絵のような大量の羽が天空を漆黒に染め、同時に、ざ
わと闇が蠢いた。伐折羅は、それをきつい視線で見据えると、

「夜の隷属、闇の戦士！ 黒馬の主は幻の住処へ戻っていった。す
みやかに夜の静寂の元へ還れ！ 逆らう者は容赦はしない。夜叉王
”伐折羅の命に従い” 闇喰鳥”の翼の風が、すべての闇を絡め取る
！」

絶対的な冷気を帯びた声音が辺りを気圧す。ココはその圧力に思
わず身をすくめてしまった。……がその後に、

「闇が……消えてゆく？」

空には再び、満天の星が輝きだした。暗い翳りが去っていった跡
からは、大量の漆黒の羽が、くるくると舞い、最後まで居残った闇
を絡め取りながら伐折羅の黒い鳥の翼の上に戻ってきていた。

「そんな……信じられない」

あんなに凶暴だった闇の戦士を全部？

「伐折羅っ、ふざけんじゃないわよ！ 散々、私を脅しといて、こんなに簡単に”闇の戦士”を追い払ってしまうなんて」

無然と抗議する少女に、伐折羅はくすりと笑い、

「強がっているわりには震えていたくせに。けれども、これで分かっただろ。毎夜、繰り返されてきた住民たちが知らない”黒馬島の夜”と”幻の黒馬”の真実が」

ココは、その言葉に答えることができず、むっつりと口を噤んでしまった。

毎夜毎夜、黒馬島の住民たちに目撃されていた幻の黒馬。

ということとは……黒馬島に来てから、私たちが平穏に暮らしていた間に、ゴットフリーは、あんな寒気のする”紅と闇の戦い”に、ずっと参戦していたっていうの。

悔しいような後ろめたいような気持ちに胸に溢れてくる。その時、ふと、薄く白い光が漏れ出しているような気がして、ココは視線を自分の横の空間に向けた。

「ねえ、伐折羅、ここ、何かぼんやりと光ってない？」

「光？ 別に何も見えないけど」

「ほら、光ってるじゃないの。ひび割れたみたいに長く……」

その時突然、ココの真横の空間が大きく左右に裂けたのだ。

「きゃ……！！！！」

驚く間もなく、びゅうと冷たい風が吹き、ココの体はあっという間にその間へ引きずり込まれてしまった。伐折羅は咄嗟に手を差し伸ばしたが、突然、漏れ出した光に視力を奪われ、彼女の姿を見失ってしまった。

巨大な鳥の羽音だけが辺りに響いている。

伐折羅の黒い鳥の上に一人で残された少年は、空間の裂け目も白

い光も少女も、すべてが消えうせた黒馬島の空で、

「夜の風があの子をさらっていったって？」

でも、どうして……。

幻の黒馬の上からこちらを振り返ったゴットフリーの殺伐とした表情が、一瞬、脳裏に浮かぶ。

何もかもが腑に落ちなかった。けれども、胸騒ぎを抑えきれず、伐折羅は、当惑の影を帯びた漆黒の瞳を、少女が消えていった空間そらに向けるのだった。

＊ ＊

「お頭は、妙な娘と黒い鳥に乗って、どこかへ飛んでいっちゃいました……だよ」

「天喜が怒るぞ。せつかく、西の山に乗り込んだってのに、ココを連れずに帰ってきました……だなんて言ったら」

朧に雲がかかった月明りの下を、2mほどもありそうな長剣を背負った巨漢と、小ぶりの弓を携えた青年が歩いてゆく。

タルクとラピス。二人は伐折羅の黒い鳥の跡を追って行ったココを探しに、黒馬島でも最高に畏れられている“西の盗賊”のアジトに向かったのだが……。

「西の盗賊っていうのも大したことなかったな。ちょっと、長剣を振り回してやっただけで、震えあがっちゃって」

「そりゃ、タルクみたいな大入道に乗り込まれちゃ、俺だって怖い」「はっ、心にもないことを。ラピス、お前、いったい何人、あいつ

らを木に磔^{はりつけ}にしてきたんだ？ 暗闇からでもお構いなしに的を射てくる、お前の弓の方が俺はずっと怖い」

ラピスは、タルクの言葉に小気味良さに笑った。物の明暗は、彼には何の影響も及ぼさなかった。この世のすべてのモノは心で感じる。……と、その時、

「タルク、空から妙な音が響いてこないか」

そう問われて、巨漢は耳を澄まし、

「……いや、別に」

と答えながらも、タルクは、当惑した面持ちで隣の青年に目を向けた。

こいつは、盲目のせいもあって、人の目に見えぬものを敏感に察知してしまう。また、おかしなモノが出てこなければいいんだが。

すると、

「タルク、ラピス！」

彼らの名前を呼ぶ声が、下山道の方から響いていたのだ。タルクは、息せき切って坂を駆けて来る、とび色の瞳の少年の姿に眉をしかめ、

「ジャン、どうしたんだ？ そんなに慌てて」

「慌てないわけにはゆかないよ。あっちの方向の空が、おかしいんだ。妙な白い光が天空から漏れ出している。それに、ほんの一瞬だけど、僕を呼ぶ声が空から響いてきたんだ」

ジャンは、そう言いながら、町はずれの方向の空を指差した。

「本当か！？ まさかその声って、ゴットフリーなんじゃ？」

「分らない。でも、二人とも早く僕と一緒に来て！ 何かとんでもない事が起きそうな気がするんだ」

Chapter 11 二人のゴットフリー

「ここ……どこ？」

夜の風に突然引きずり込まれ、落ちていった場所で、少女は啞然と廻りを見渡した。

ついさっきまで、黒馬島の空に瞬いていた満天の星はどこへ行ってしまったのだろうか？ 目の前に広がっているのは、それとは、どう考えてみても異った空間だった。

腰のあたりまで丈を伸ばした未知の花々が、見渡す限りの紅の花園を作り出している。

この場所は空気までが紅に染まるようで……何て芳しく、何ておぞましい……。

“幻の黒馬”に率いられた闇の戦士に蹴散らされた紅の灯——海の鬼灯——が、また、戻ってきたのではないかと思えるほどの一面の紅蓮の花園。

黒馬島の空の一角にびっしりとこびりついていた紅の灯と同色の……その不吉な光景を見ているうちに、ひやりと冷たいものが、背中を通り過ぎていった。瞬間、甘い花の香は、むせ返るようにきつい刺激臭となって鼻先に流れてきた。ゆらゆらと揺れるようなおかしな感覚が頭の中に湧き上がってくる。

駄目だ。この香りを嗅いじゃ。

冷たい風が頬を撫でてきたのは、ココがそこはかとな身の危険を感じて、鼻を手で押さえようとした時だった。花の香とは別の臭気が風上から流れてくる。

血の匂いが……。

錆びた鉄のような香りが流れてくる先に目をやると、紅の花がその場所だけ薄ぼんやりと輝いているのが見えた。行ってみたい気持ちと、行っては駄目だという気持ちが交互に心に湧きあがってくる。けれども、ココの足は知らず知らずのうちに、その光の方向へ歩き出してしまっていた。

＊ ＊

「ゴットフリー……、何でこんな所に!？」

全身を血に染めた男が、薄く光る紅の花の中で、うつ伏せに倒れていた。伐折羅の黒い鳥の背から見たのと同じ血まみれの姿。胸元に堪った血溜まりの中からも紅の花が茎を伸ばし、その場所が光を放っていたのだ。ココは、ぴくりとも動かない男に、怖々、近づく膝をおって、その顔を覗き込んでみた。

もしかしたら、死んでたりして……

不安な気持ちでそっと頬に触れてみたが、肌はほのかに暖かく、額に流れる鮮やかな血の色が、まだ息のあることを物語っている。ココはほっと安堵の息を吐いた。

「ゴットフリー、起きて! こんな場所にいたら駄目だよ。早く、黒馬島に戻って、ラピスに診てもらわなきゃ」

ところが、肩を掴み、彼を揺り起こそうとした時

ゴットフリー
“彼を起してはなりません”

紅に染まった空気を押しのけ、吹きつけてきた突風が、ゴットフリーの元からココを引き剥がしたのだ。風は、冷気を放ちながら見る見るうちに人の姿を取り始める。

腰まであるストレートの黒髪。夜色の瞳。それと同色の長いドレスは裾の部分が翳ろい、先が全く見えない。

レインボーヘブンの欠片“夜風”

目の前に現れた月影のような乙女の姿に、

「霧花^{きりか}！」

ココは、驚くと同時に、怒りを覚えてしまった。

「彼を起すなって？ 冗談じゃないわ！ 霧花と一緒にいたんなら、もっと早くゴットフリーを助けてやれたのに、どうして、そうしてくれなかったのよ！」

霧花は、少女の強い口調に、沈痛な面持ちで紅の花の中に倒れている男に視線を向ける。そして、消え入りそうな声音で、

「まだ、彼を目覚めさせるわけには……ゆかない。それに、私の力では、この場所から彼を出してやることもできない」

「何で駄目なの！ このまま放っておいたら、ゴットフリーが死んじゃう」

「この空間は私やココの世界とは違うの。ここはゴットフリーが見ている夢の中。女神アイアリスは、その夢の中に彼を閉じ込めた。けれども、同時にゴットフリーは、自分の夢の中にアイアリスを縛り付けた。黒馬島が今まで平穏無事でいられたのはそのおかげなのだから、まだ、彼を起こしては駄目。彼が夢から目覚めれば、最後の戦いが幕を開けてしまうから」

ココは、霧花の言葉の意味がさっぱり理解ができず、強く眉をかめた。

ゴットフリーの夢の中？ ここが……？

空間の一角に新たな裂け目ができ、眩いばかりの白い光が差し込んできたのは、その時だった。紅の花園が白銀に染まり、辺りは一瞬にして雪景色のように様を変えた。とたんに、霧花は身を翻し空

気の中に溶けるように消えてしまった。

“ココっ、隠れて！ 女神アイアリスが降臨してくる。見つければ八つ裂きにされてしまうわ。だから、早くっ！”

「アイアリスが?!」

うろたえたココが、視線を向けた先の白い光。眩しきになれ、見つめ続けていると、それが徐々に人の形を成してゆくのが見て取れた。

白い百合が花開いたような純白の衣。その衣から透けて見え隠れしている虹色の光。白銀の髪は自ら眩い光を放ち、玉のような白い肌の中で、青い瞳だけが、唯一色をなしていた。

人? ……ううん、あの神々しい姿にそんな下賤な言葉は似合わない。

ならば、白い女神アイアリス? ……けれども、

どうして、あの女神は、あんなに冷たい目をしているの。

ココは、紅の花の中に身を伏せると、凍りつきそうな畏れに慄きながら、息を止め、出来うる限りの努力で自分の気配を消そうとした。

どうか、見つかりませんように

泣き入りそうな顔で震えながら。

Chapter 12

ジャンとラピスは、下山道を全速力で駆け下りていた。西の山の上にかかった朧な雲が、月明かりを遮り、道を照らす光は弱い松明の灯に限られていたが、彼らに不都合なことは何もなかった。ジャンの目は障害物がなければ千里の先でも見通す。そして、盲目のラピスにとって闇の中を駆けるのは、光の中を駆けるのときほどの違いはなかったのだから。

タルクはといえば、暗闇の中で二人のように自由自在に駆け回れるわけもなく、早々にリタイアを決めて黒馬亭で待機する側に回っていた。

登山道を下りきり道の傾斜が平坦になったところで、さすがにラピスは足を止め、

「ジャン、待って、ちょっとだけ休憩」

平然と後ろを振り返った少年に、息を切らしながら、

「ところで……俺、まだ聞いてなかったけど、お前、一体、どこへ向かって走ってるんだ」

「何を今更……白い光が漏れ出していた空の下。僕たちが同時に異変を感じた場所に決まってるだろ」

「そんなことは分かってる。俺が聞きたいのは……」

むっと声を曇らせたラピス。するとジャンは、

「そこには、多分、ザールの屋敷跡がある」

「ザール？ 初めて聞く名だが」

「ザールは天喜と伐折羅の叔父だ。今は行方不明らしいけど……あいつ、ろくな奴じゃなかった。今は廃墟になっているが、あの屋敷にあった紅の花園は、ゴットフリーにとっての鬼門の場所なんだ。彼を紅の花園に近づけちゃならない。あの時に起きたような不吉な

ことが繰り返されるのは、僕はもう、絶対に絶対に御免なんだ」

ジャンの切羽詰った口調に、ラピスは眉をしかめ、

「ゴットフリーにとっての鬼門の場所……って？」

「以前、僕らが黒馬島に迷い込んでしまった時、ザールの屋敷にあった”紅の花園”の罠にかけられたことが引き金になって、ゴットフリーの闇の部分が発醒してしまったんだ。寸でのところで防ぐことができたのだけれど、あの時、もう少しでゴットフリーはタルクの首を手土産に闇の世界に堕ちていってしまうところだった」

「タルクの首を……ゴットフリーがか？」

背筋にぞくりと冷たいものが流れてゆく。ジャンの怖れがラピスにもひしひしと伝わってきた。なぜなら、

「……闇の部分の覚醒って……それって”闇の王”のことだよな」

海の鬼灯と闇の戦士の闘いの犠牲になって崩壊したグランパス王国。その繁栄の象徴だったエターナル城を敷地ごと、闇の世界に葬り去ろうとした彼。^{ゴットフリー}

あの時のゴットフリーの精神は完全に闇を向き、虚栄の城と紅の邪気一海の鬼灯一を生贄に、闇の世界に降臨しようとしていた。

一闇の王として――

増殖した闇の戦士を背後に従え、黒馬の背から地上を見下ろしていた、あの凍りつくような灰色の瞳。そして、壊滅の空に響き渡った全ての祝福を逆流させる負の言霊。

「俺だって、あんな身震いするようなゴットフリーには二度と会いたくないよ。その紅の花園が、彼の負の部分を目覚めさせてしまうっていうなら、急ごう！　こんな所で、休んでる場合じゃなかった」

黒馬島の町はずれの一角の夜空に時折、見え隠れしている白い光。徐々に光を強めているその場所を目指して、ジャンとラピスは、再び全速力で駆け出した。

＊ ＊

アイアリスがこっちに来る……。

全身が凍りついてしまいそうな畏れに慄きながら、ココは紅の花の下に身を伏せた。

人の腰の高さほどの花々の下に身を隠し、じっと息をひそませる。けれども、白い女神が近づくほどに、自分の隠れ処が、溢れ出す光に照らし出されてしまいそうで、心臓の鼓動はどきどきと壊れそうに音を高めていった。

白い光が頭の上をかすめた時、アイアリスは、ふとそこで足を止めた。

見つかる！ どうしたらいいの。

万事休すと、ぎゅっと目を閉じる。すると、

“ココ、何も考えるな。こちらの動きを悟られるぞ！”

突然、そんな声が脳裏に浮かんできたのだ。この声って……？

にわかに、エターナル城で白蛇に体に乗っ取られた王妃に気づかれそうになった時、盲目の弓使いが自分の気配を消して、難を逃れた場面を思い出す。

“そう、目を閉じて、何も考えずに”

ココは、その言葉に従うようにそつと目を閉じた。すると、何だか眠くなってしまった。

馬鹿、こんな所で寝てる場合じゃないのに……

……が、“それでいいんだ”と別の声に邪魔をされて、ココはどうにも我慢ができなくなり、やがて深い眠りに落ちていった。

腑におちない顔つきで、白い女神は形の良い眉をしかめた。何かがそこにいたような気がする。けれども、今は何の気配もない。

辺りには自らが醸しだす煌々とした白銀の光が広がるばかりで、紅の花々までが白に染まり、そこから迸る甘い香りだけが、この場に紅の花園があることを示していた。

無表情な女神アイアリスの青の瞳。

だが、唯一、色を失わず薄暮のような紅の光を保ち続けている場所に目を向けた一瞬、その青の中に、悲哀の影が浮かび上がった。

紅の花の中に倒れている黒装束の男。彼から流れ出る血の色の紅が鮮やかで痛々しい。

「馬鹿なゴットフリー」

何故、光の中のお前は、そこまで女神の私を拒む……

気が狂いそうな焦燥感に苛まれながら、くるりと身を翻すと、アイアリスは目の前の空間に手をかざした。すると、紅の花がほうばうに舞い散り、空間が縦に大きく裂けた。アイアリスは白い光に包まれたまま、その中へ消えてゆくのだった。

Chapter 13

紅の花園の空間を縦に裂いた先の別の空には、満天の星空が広がっていた。裂け目を抜けて降り立った女神アイアリスの姿が、異空間の夜の下で白く輝く。音という音は何もなかった。ただ、対極の光度を誇示しながらも光と闇は、静寂の中で一定の調和を保ち続けていた。

女神の降臨の光が辺りを照らし出した時、夜を支配していた闇は、神殿のような建物の影を地表の一角に浮かび上がらせた。

逸る心を抑えもせず、暗い階段を駆け上ったアイアリスは、純白の光彩に包まれながら閉ざされていた影の扉を大きく開け放つ。すると、大広間の奥の窓辺に座っていた男が、灰色の瞳を光の方向へ向けたのだ。

闇色の装束に身を包んだ男は、視界に入り込んできた光に眩しげに目を細めたが、艶やかな女神の姿を認めると笑みを浮かべ、立ち上がってその方向へ歩きだした。

彼の元に早足で駆けてきたアイアリスをその腕に抱きしめる。

「ゴットフリー、ここで、何をしていたの」

「空の向こうの”紅と闇と人”の生き死に見極めていた」

「そんな下等な物たちの命など、気にすることは何もないのよ。レインボーヘブンを二人の物にしなければならないのだけれど、私はそんな虚夢のような楽園よりこの場所が気に入った。ここに居ましょう。未来永劫、私とあなた、二人きりで」

腕の中から、見上げてくる清廉な青の瞳を、研ぎ澄まされた灰色の瞳が見返す。

「ここは闇の世界だ。光の女神のお前の場所ではないはずなのに」

「私はこの闇が心地よい。あなたが私を愛してくれれば、私は闇の王の妻となり、この場所を白の光で彩りましょう。だから私を受け入れて。私の光はもはやこの闇の中でしか輝く術を見出せない」

「闇の中の光の女神。それが、お前の想いの果てか。生きとし生ける者と物のすべての命を貢物に、お前は闇の王の妻になるというのか」

ゴットフリーは、アイアリスの言葉に鮮やかに笑った。そして、黒一色の衣の中に白の女神の体を強く引き寄せると、迸る光を暗い闇で遮るようにその唇に口づけた。

苛立つような冷気を放ちながら、夜の風が、光と闇の間を吹き抜けてゆく。

“まだ、彼を起してはなりません”
ゴットフリー

けれども……

＊ ＊

ジャンは辿りついたザールの屋敷跡で、啞然と廻りを見渡した。以前の鬱蒼とした屋敷の姿はすでになく、今は燃え残った瓦礫が積みあがるばかりで、屋敷の隣にあった紅の花園は、枯れ草が広がる茶色い荒野になりさがっている。

外灯のない屋敷跡は暗闇に包まれ、怪しげな空気を醸しだしている。普通の者ならば、こんな廃墟の中に入る者は誰もいないだろうが、上空に見え隠れする白い光が、とび色の瞳の少年の心を強く引き付けた。

「あそこだ。ラピス！」

……が、共に来た盲目の青年を誘い、茶色に変色した花園の中を進もうとした時、

「……？」

ジャンは、枯れ草の蔓に足をとられて転倒した彼を、腑におちない表情で見た。こいつは見えなくても、心ですべてを感じることができるはずじゃなかったのか？

ラピスは悔しげに唇をゆがめて言う。

「ジャン、俺を置いて早く行って！ この場所には正常な力なんか働いていない。今の俺は、前も後も右も左も、何も察知することができなくなってしまうてる。このままじゃ、ただの盲人と同じで、きつとお前の足手まといになってしまうから」

「えっ、でも、それなら尚更、ラピスをこんな危ない場所に置いてなんて行けないよ」

「俺のことなんて気にするな！ もたもたしてると、ゴットフリーを探し出す機会を失ってしまうぞ」

その言葉にジャンは一瞬、戸惑いを隠せぬ顔をした。けれども、暗い空に時折、顔を覗かせる白の光の強弱が心を急き立てた。

「なら、ラピスは、この屋敷跡から外に出て！ それも、できるだけ早く」

分ったと、青年が返事をする前に、もう、ジャンは花園の奥に向かって走りだしていた。

高まってゆく緊張感とは裏腹に、まったく分らなくなってしまった周囲の状況に、残されたラピスは苦笑する。

まいったな……。ジャンにああ言ったものの、後戻りするにも、方角がさっぱり分らない。これじゃ、あの時の状況とまるで同じじゃないか。

崩壊したグランパス王国の虚無の王宮の中で、白蛇に変化した王妃と対峙した時も、ラピスには王妃以外の何もかもが、察知できなくなってしまうことがあったのだ。

けれども、あの時は傍にココがいて、俺の眼の代わりになってくれた。

途方にくれて辺りの様子を手探りで確かめようとした時、ふと、盲目の弓使いは上の方から響いてくる小さな声に耳を澄ませた。

“馬鹿……私、こんな所で眠っている場合じゃないのに……”

その声が届いた瞬間、ラピスは、がばとその場で立ち上がり、「ココ?! ココなのか? お前、一体、どこにいるんだ!」空に向かって、声を上げた。

Chapter 14

濁濁とした黒馬島の空に稲光る白い光。茶色く変色し、からからに乾燥した花園を踏み分けて、その真下にたどり着いたジャンは、今にも破裂しそうに膨れ上がった灰色の雲に、どうしようもない重苦しさを感じてしまった。

限界ぎりぎりまで、こらえることを強いられてきたような焦燥感。自分をここへ呼び寄せたものがそれならば……。

「気に入らない。その牢獄の鉄格子みたいな雲、僕が真つ二つに切裂いてやる!!」

……が、大地の力を手元に集めようとした時、

” 止めて! この場所には、まだ手を出さないで!”

突然、目の前を遮るように吹き付けてきた風に、ジャンは強く眉をしかめた。

「お前、霧花だな? それ、本気で言ってるのか。あの雲の間の苛立つような白い光。あれは、どう見ても外へ出せと僕らに訴えかけてきているじゃないか。たとえ、それが悪い結果を呼び起こすとしても、僕はその意思に従う!」

” 駄目!! 今、ゴットフリーを目覚めさせれば、闇と光の均衡が崩れてしまう。それに、向こうの世界にいるココがどうなってもいいの? あの娘だって無事には済まないかもしれないのよ!”

「ココが? ……なるほど、ずっと、あの娘の声が頭から離れなかった理由はそれか」

ジャンは一寸、口を噤んだ。だが、すぐに顔を上げると、
「そして、向こうの世界だって？　そこにゴットフリーもいるわけか。それなら、尚更、僕はここから手を引くわけにはゆかない」

” ジャン！　どうして！？ ”

「それが彼の意志だから！」
ゴットフリー

邪魔だとばかりに腕を一振りして、すがり付いてくる風を振り切る。

「黒馬島！　僕に力を貸してくれ」

ぐんと腕を差し伸ばし、手のひらを大地に向けて大きく開く。そこから溢れ出した蒼の光を足元に投げ出すと、ジャンは渾身の力をこめて叫んだ。

「蒼の光と見えて鍛えし大地の剣、黒き礎より出いずる光の太刀よ！」
まみ

少年のとび色の瞳が黄金に変わる。

「己が刃で暗き空を貫き通せ！！」

その声に応え、大地がうなりをあげた瞬間、稲妻のような亀裂が走り、その奥から漆黒の影が吹き上がってきた。それは、蒼の光と交わりながら上にゆくほどに先端を尖らせてゆく。そして、空に蔓延る厚い雲の壁を” 蒼と黒 ” の力の刃で、一気に貫いた。

灰色の雲の中で白の光が炸裂した。悲壮な声をあげた夜の風は、爆風の隙間をかいくぐって、急を告げるように天上に上っていった。すると、空が突然、紅蓮に染まったのだ。そこから大量の紅の花びらが地上に向けて落ちてきた。

鼻孔の中に入り込んでくる強く甘い花の香り。
ぐるりと周りを取り巻いた紅一色の花の群れ。
ひからびて鬱蒼とした茶色の荒野は、もう何処にも見えない。

「紅の花園……」

一瞬にして紅に染まった花園を啞然と見やる。その一角に、ぼんやりと浮き上がる薄い光を見つけた時、ジャンはとび色の瞳を大きく開いた。

＊ ＊

何も見えなかった。この場所にはまともな力なんて働いちやいない……普段、心で感じる事ができるすべての物が、今は空白とは思えない。

「まいったな。前も後ろも何も分からない……ジャンには大丈夫だなんて言っちゃったけど、俺はどうすりゃいいんだ」

ただ、さっき、聞こえてきた声は、確かにココの声だった……。

けれども、彼女の名前を声を大にして叫んでみても、何の答えも返らなかったのだ。

鼻先に甘い花の香りが流れてきたのは、途方に暮れたラピスがため息をついた時だった。

何だ……この香り。

不審に思い、手探してみると、からからに枯れて触れると崩れ落ちてしまっていた手元の植物の感触が、やけにひやりと瑞瑞しい。
すると、彼の脳裏に突然、鮮明な感覚が浮かび上がってきたのだ。

何も察知できない……？ いや、違うぞ。どんな力に邪魔されても、この元気なオーラはすぐに分かる。

その瞬間、ラピスはたとえ立ち上がり、

「ココ！！ ココなんだろう？ 待ってて、今、そこに行くから！」
前方に感じる明るい光の方へ、形振り構わず走りだした。

Chapter 15

甘い花の香の中で少女の腕を捕らえ、その体温を真近に感じた時、ラピスは、つい嬉しさと苛立ちが混じりあったような声を上げてしまった。

「ココ！ 西の山に行ったはずのお前が、どうしてこんな所に現れるんだよ！」

「え、だって、伐折羅の黒い鳥から落ちて……」

「伐折羅の黒い鳥？ そこから落ちた場所が、ここだったって言うのか」

「えっと、そうなのかな……いや、違うかも……」

まだ、眠気が覚めやらぬように、ぼんやりとラピスの顔を眺めてから、辺りを見回す少女。その視線の先には、見渡す限りの紅の色が広がっている。

「紅の花園……」

ココがはっと大きく瞳を見開いたのは、その瞬間だった。

「ゴットフリー！ ゴットフリーがいたの！ 紅の花園で血まみれになって！」

「何っ、それって本当か？！」

「アイアリスがやって来て、青い瞳で……。私、八つ裂きにされそうで、どうしよう……。ゴットフリーが……。ゴットフリーが死んじやう」

言ってる意味がよく分からない。けれども、少女の口から流れ出る物騒な言葉の羅列が、背筋を寒くさせた。ひどく混乱した様子の頬をはたきながら、ラピスは言う。

「ココっ、お前、もうちょっと、しっかりしろよ！ ちゃんと説明してくれないと、ちっとも訳がわからないじゃないか」

「え、あれ？　周りで紅の花が揺れてるよ」

絶対にこいつはおかしくなってるぞと、焦って名を呼び、肩をゆすってみても、何も反応が返ってこない。その時、先ほどまで甘く流れてきた花の香が、つんと強く鼻の中を刺激してきた。すると、ラピスの脳に膨大な危険信号が流れてきたのだ。

ココの様子がおかしいのは、このせいかな！？

そういう自分自身も強さを増してゆく刺激臭を嗅ぐうちに、意識が朦朧としだした。頭の中に幾重もの波が押しは引いてゆく。その揺れる感覚に飲まれてしまいそうになったラピスは、血相変えて、一方の手でココを腕の中に抱えると、もう一方の手で自分の鼻先を覆った。

この香りは危険。

この花の香は、人の心を狂わせる……。

分かっている、呼吸を止めるわけにもゆかず、ますます危うくなってゆく感覚をどうにもできない。そんな自分に苛立ちはじめた頃、別の意識が内側からラピスに話しかけてきた。

”この場所はすでに人外境。成り代われ、お前にはもう無理だ”

無理じゃねえよと、頭の中に響いてくる声に反論したくても頭の中の痺れはどんどん酷さを増してゆく。このままでは、腕に抱えている少女まで台無しにしてしまいそうで、ラピスは、諦めたように声の主に主導権を譲り渡そうとした。……が、

”馬鹿っ、レインボーヘブンの欠片”樹林”、お前は、むやみにラピスの表面^{おもて}に出てくんな!!”

足元を震わすような声が紅の花園の真下から響いたかと思うと、突然、黒い大地が二つに裂けのた。

「だ、誰だ?!」

いかにも気の強そうな声音に呼び起こされ、再びラピスは意識を取り戻す。すると、大地の裂け目から突然、鈍く輝く鉄色の光が飛び出してきた。そして、彼らの前に漆黒、黒髪、焼けた肌の少年が現われた。

“俺は黒馬島。名前は”クロ“。ジャンは今、ちょっと忙しそうなんだ。だから、ここは俺に任せとけっ”

驚く間もなかった。ラピスとココは彼に腕を取られた瞬間、黒い大地の裂け目に落ちていった。

Chapter 16

目が眩むほどの鮮やかな紅。

その色に彩られた花園の光溜りにうつ伏せ、倒れている男。強く甘い香りが満ちる中で、男のあちこちから流れる鮮血が紅蓮の花々と同化し、身につけた黒衣だけが影のように沈んで見える。

ジャンは、一瞬、異空間と現実の狭間に迷い込んでしまったような、おかしい感覚に陥ってしまった。幻覚を振り切るように頭を強く横に振る。夢ではないのかと、啞然とした表情で近づいてゆくと、「ゴットフリー、何でこんなことになってるんだ……」

自らが、ラピスに伝えた言葉を思い出し、強く唇を噛み締めた。

ここは彼の鬼門の場所。

憤りとも焦りともつかない苦い思いが胸に込みあがってくる。

なぜ、今まで僕を呼んでくれなかった？ たとえ心の中だけでも、そうしていてくれれば、居場所を探しだすことができたのに……。

泣きたいような気分で倒れている男に手を伸ばす。ところが、

”ジャン、止めて！ あなたの強い力に触れると、ゴットフリーの意識が現実に戻されてしまう”

手元に吹き付けてきた烈風に、ジャンはむっと表情を曇らせた。

「お前、霧花だな？！ 一体、どういふつもりなんだよ！ ゴットフリーの行方を知ってたくせに、今まで黙っていたなんて」

“アイアリスがゴットフリーの夢の中に作り出した異空間。あなた

が手をだしたせいで、それが崩れかけてしまっている。これ以上、余計なことをすれば、ゴットフリーが命がけで守ってきた闇と光の均衡がすべて壊れてしまうわよ。そんなことになれば、今、成りを潜めている海の鬼灯が一斉に黒馬島に攻め込んでくるのが分らないの！」

「異空間？　なるほど、アイアリスはゴットフリーをそこに閉じ込めていたってわけか。いくら僕らが探しても彼を見つけれなかったはずだ。だが、異空間でゆっくりと刻まれた時間も、こちらの世界では早く進む。この紅の花園は怪しくたって現実世界だ。こんな傷だらけで放っておけば、この男はじきに命を失ってしまうぞ。海の鬼灯がどんなに大量に攻め込んできたって、僕がすべて止めてみせる！　光と闇の均衡を保つためにゴットフリーを犠牲にするなんて、まっぴらだよ！」

“犠牲にするなんて……馬鹿なことを！　それより、ジャン、どんなにあなたの力が大きくても、紅の邪気を一人で止めれるわけがないのよ。何のためにゴットフリーがこんな境遇に耐えて、迫る紅の邪気を蹴散らし、アイアリスを自分の世界に縛り付けてきたか、それを考えてみて”

けれども、ジャンは霧花の言葉に微妙な表情をした。

「耐えてきたって……？　本当にすべてが、そうだったんだろうか」

“……どうということ？”

「らしくないんだよ。ゴットフリーがただ耐えて、一人で黙々と戦っているだけだなんて。あいつを異空間に留めていたものが、他にあるって……僕にはそんな気がしてならないんだ」

夜の風は、一瞬、戸惑ったように口ごもる。

“私には、分らない……”

「分らないって？ いい加減な話だな。ゴットフリーは黒馬亭に連れて帰る。だから、もう、僕の邪魔をするのは止めてくれ！」

だが、再び、倒れている男に手を伸ばそうとしたジャンの前に、黒い影が立ちふさがった。それは、徐々に人型を織り成し、漆黒の瞳と髪 of 乙女に姿を変えてゆく。きりとした眼差しで前を見据え、その手の上に巨大な扇が広げられた時、身を切るような寒風が二人の廻りを取り囲んだ。大地の力を持った少年は、とび色の瞳を鋭く煌めかし、

「霧花、止めとけよ。お前が力づくで僕を止めるなんて、できるわけがないだろう」

「いいえ、止めるわ」

その台詞を霧花が口にした瞬間、ジャンはぎょっと目を見開いた。彼女が手にした黒蝶のような扇を自分の咽喉もとにあてがったのだ。

「おい！ 何のつもりだ！」

「もし、あなたがゴットフリーをここから連れ出すというのなら、私は迷わず、この夜扇で自分の首を落とします。夜扇の羽は鋭い刃物と同じ。至福の島、レインボーヘブンの復活には七つの欠片が必要なのでしょう？ その中の一つ”夜風“の私が欠けたなら、もう、あなた方はレインボーヘブンを手に入れることは未来永劫でなくなるのよ。どう？ それでも、あなたは私の願いを聞かないと言えるの」

捨て身の構えで睨めつけてくる漆黒の乙女に、ジャンは苦い視線を返した。

霧花は、ゴットフリーに関わり出すと、平気で自分の命を投げ出す奴だ……畜生、ここは僕が折れるしかないのか。

「ここにゴットフリーを置き去りにして、命が本当に尽きてしまつたら、霧花、お前は一体、どうするつもりなんだよ。まさか、それでも、黙って見ていろと言うつもりじゃないだろうな」

「そんなこと言うはずがないわ。だから、せめて、3日……3日間だけ、彼をここに留めておいて。あなた方はその間に黒馬島の戦闘態勢を整えて。そして、伐折羅を探して！」

「伐折羅を？ 闇の戦士を味方につけようっていうのか」

「そうよ。ゴットフリーの夢が消えれば、アイアリスだって、この世に降臨してくるわ。邪神の女神と紅の邪氣に同時に襲われれば、いくら、ジャンの力が大きくても一人で守りきるなんて無理。地上はジャンとクロと住民たちが。空は闇の戦士を率いた伐折羅と私、そして、海はBW、そんな風に全員で、黒馬島の守りを固めるの」

ジャンは霧花の言葉に、一瞬、口を閉ざした。……が、確かに彼女の言うことは理にかなっていた。

「分った。だが、3日だけだ。3日たてば、状況がどうであろうと、僕はゴットフリーを黒馬亭につれて帰る！ だから、それまでは、霧花、お前が彼をここで守るんだ。何かあったら、許さないからな。その時は僕だって、冷静でいられるとは限らないから」

そう言ってみたものの、割り切れない思いは胸に残る。ジャンは、紅の花の中で倒れている男の方に目を向けるのを避けるように、くると踵を返すと、花園の出口の方へ足早に去っていった。

Chapter 17

「いくらなんでも、土くれの中に引きずり込むなんて乱暴すぎるぞ！」

「助けてもらっというて、文句を言うな。ちゃんと逃げ道は空洞化してやったんだから、呼吸はできただろ。あのまま、紅の花園にいたら、二人とも花の香にまみれて気が変になっていたところだ」

ラピスは眉をしかめると、その声のする方向へ意識を向けた。いかにも勝気そうな少年の声音。確かに、頬にあたる涼しい風とさらさらと流れる水の音は、ここが先ほどもでの咽返るような紅の花園とは、別の場所であることを示しているのだが……

この川の流れ……まさか、ここって黒馬亭の近くの川辺か？　こいつは、俺とココをあの得体の知れない紅の花園から、こんな場所まで移動させたのか。

レインボーヘブンの欠片”黒馬島”名前は”クロ”

そう名乗るだけあって、この少年が醸しだしているオーラには、ジャンと同質の底が知れないものを感じる。

けど、黒馬島？　ってことは、この少年が、今、俺たちがいる”この島”ってわけか？

ちっとも、合点がゆかない。ラピスは戸惑いを隠せなかった。とはいっても、彼自身の物を察知する能力も元に戻ってきているようだったし、感じ取れる水の流れはしごく清涼で、頭の痺れるような強い花の香に意識を飛ばされてしまいそうになったことを思えば、とりあえずは、ほっと胸を撫で下ろした。川辺から聞こえる少女の

はしゃぐ声に、

「ココ、お前はいつも気楽でいいよな。あんな目にあった後でも、けろりとして」

「だって、水に触れてると気持ちいいんだもん。それより、ラピスの顔っ！ 土で真っ黒だよ。川できちん^と洗ったら」

「黒かろうが、紅^{あか}かろうが、俺は見えないから、関係ないってものだ」

「ラピスは良くても、そんな成りで黒馬亭に帰ったら、天喜やフレアお婆さんがびっくりしちゃう」

その瞬間に、少女が浴びせかけてきた、冷やりとした川の水。

「あっ、こらっ、止めろ！」

「あははっ、面倒臭いなら、いっそ川の中に入っちゃえば」

「びしょぬれになるのは御免だ！ お前って、何で、そんなに馬鹿みたいに元気なんだよ」

「それだけが取り得って、いつも言ってるのは、どこの誰でしたっけ」

そんなやり取りを、クロは珍しそうに眺めていたが、ココは標的を見つけたとばかりに、

「あんたもレインボーヘブンの欠片？ 会うのは初めてだけど、ジヤンの仲間だよね。ってことは、私とはお友達みたいなもんじゃないの」

ココは笑って、今度は、日に焼けた肌の少年に向かって、川の水を浴びせかける。……が、その瞬間、きょとんと目を瞬かせた。

水が体を通り過ぎた……。

すると、クロは苦い笑いを浮かべて言った。

「俺は実体じゃないからね。この体は幻のようなものなんだ。だって、もし俺が実体だったら、黒馬島は消えてしまっただよ。それじ

や、みんなが困るだろ」

けれども、理解しがたい顔つきのラピスとココを深い黒色の瞳で見やると、肩をすくめ、

「それより、ジャンが紅の花園を出たぞ。だから、早く、お前たちも黒馬亭へ帰った方がいい」

「ジャンが？ ゴットフリーは？ ジャンはゴットフリーを助けてくれたの！」

その言葉にラピスは驚きを隠せなかった。

「ココ、お前、今、何て言った？ ジャンがゴットフリーを助けるって？ まさか、ゴットフリーがあの花園にいたのか」

「うん……伐折羅と黒い鳥で幻の黒馬を見た後に……空の裂け目から落ちた場所が紅の花園で、ゴットフリーはそこで血まみれで倒れて……」

「えっ！」

思わず、身を乗り出してしまったラピス。それをクロが制する。

「詳しいことは、黒馬亭に帰ってからジャンに聞いた方が早いと思うぞ。それに、ここだって、完全に安全とは言えなくなって来たようだし」

クロが指差した川上の方向。その光景を見つめて、ココはぶるりと身を震わせた。澄んだ青緑色の透明な水の上に、妙に違和感のある紅の色がちらちらと浮かびながら流れてくる。

「紅の花が……こっちに流れてくる」

ラピスは、その時、咄嗟に川辺に近づき、水の流れに手を伸ばした。すると、手元にかさりと、流れ着いた紅の花が入り込んできた。「痛っ！」

それが紅の閃光を放ったのは、突き刺すような痛みが彼の手の中に走った瞬間だった。

「海の鬼灯か?! 畜生、あの危険な香りにしたって……花園の紅の花は、やっぱり、あの邪気の”化身”だったんだな」

そんな花園の中に、ゴットフリーが倒れていたなんて……

ラピスは、込みあげてくる憤りを抑えきれぬように、ぎゅっと手を握り締めた。すると、空に逃げようとした紅の灯はとたんに光を失った。手の中から消えてゆく邪悪な感触を確認してから、彼は茶色く変色してしまった紅の花びらを川面に無碍に投げ捨てる。すると、ココが言った。

「ラピス……紅の灯が川上にたくさん集まってきてる。ただ、こちらにはやって来る様子はないけれど」

ちっ、海の鬼灯め、こちらの出方を見てやがるんだな。

傍にいる少女の手を取って、ラピスは黒馬亭に向かって歩き出す。

「行こう、ココ。こんな所でゆっくりしてる場合じゃなかった」

「ちょ、ちょっと待って！ クロも一緒に」

だが、見る間に薄れてゆく彼の姿に、ココは、再び目を瞬かせた。浅黒く日に焼けた少年が、足元から透けて消えてゆく。

「俺は、あまり長くこの姿でいるわけにはゆかないんだ。だから、俺のことは気にせず、早く行ってくれ。ここの海の鬼灯は、今の様子ならまだ心配はなさそうだし」

首を縦にこくと振って、そそくさと歩いてゆくラピスと、まだ心残りそうに後ろを振り向きながら、彼に連れられてゆくココ。彼らの後姿を見送りながら、

レインボーヘブンの欠片”樹林”か……。

クロは苦い笑いを浮かべた。

「あまり、奴には表面に出てきて欲しくないんだけど、黒馬島の住民を抱えている俺が、下手に動くわけにもいかないしなあ」

まあ、いいか。

あの盲目の弓使いの中に隠れた彼の力を見せ付けられて、さすがの紅の邪気も、今は気圧されているようだから。

川上に密集した紅の灯が苛立つように暗い気を放ち続けていた。その澱んだ光に鋭い一瞥を送ってから、クロは溶けるように姿を消していった。

Chapter 18

「アイアリスが、ゴットフリーを夢の中に閉じ込めていたって？」
黒馬亭の2階で、タルクは苦虫を噛み潰したような顔をした。その手前には、むっつりと頷くジャンと、土まみれのココとラピスが立っている。

また、俺には理解不能な事が起きてやがる……けれども、こういう時は考えるより受け入れる方が、絶対に手っ取り早いんだ。

ガルフ島、黒馬島、グラン・パープル。そして、再び、黒馬島。

海に沈み、消え、崩壊し、そして再び姿を現した島。そのすべての過程をゴットフリーやジャンと共に過ごしたタルクは、こんな場合の対処法を熟知していた。急遽、居合わせた天喜とラガーにも声をかけ、食事用の大テーブルに座るように促す。

「ココとラピス！ お前らはちゃんと土を払ってから座れ。フレアお婆さんの仕事が、また増える」

そんな風に彼らが全員、席についたことを確認してから、タルクはココに、

「……で、ゴットフリーが瀕死の傷をおって、紅の花園にいたって
いうのは、一体どうい^{わけ}う理由なんだよ」

「幻の黒馬」

「幻の黒馬？」

「私が伐折羅と一緒に黒い鳥で空を飛んだ時、突然、ゴットフリーの乗った黒馬が空間の裂け目から現れたの。“闇の戦士を率いた漆黒の馬”それが、毎夜、毎夜、島で見かけられてた“幻の黒馬”の正体だった。けれど、外海からは、怖いくらい沢山の紅の灯が押し寄せてきて、それをくい止めるために、ゴットフリーは見ちゃい

られないくらいの傷をおった」

すると、ラピスはえっと声をあげ、

「ち、ちょっと待ってくれよ。紅の灯って“海の鬼灯”のことだろ。あの邪気がゴットフリーを切り刻みがやっただっていうのか」

さっき、川辺で海の鬼灯の化身の”紅の花”を拾い上げた時、手の中に感じた鋭い痛み。あれが集団になったのと、戦うだなんて……俺だったら絶対に御免だ。考えただけでも、ぞっとする。

黙り込んでしまったラピスの気持ちを知ってか知らでか、ココは語気を強めた。

「霧花は言ってた。黒馬島が今まで平穏無事でいられたのは、ゴットフリーが捨て身になって、海の鬼灯から島を守ってくれたからなんだって」

だが、ラガーは微妙に頬の傷を歪め、

「捨て身になってねえ……けど、グラン・パープルでのあいつの”闇の王”っぷりを見ると、ゴットフリーは目前の目障りな敵を叩き潰したいがために戦っているような気がするけどな。まあ、百歩譲って、黒馬島を守るためだとしても、アイアリスに夢の中に閉じ込められているはずのゴットフリーが、何で現実世界の黒馬島の空に現れるんだよ」

「あの黒馬は、闇と光の間を駆ける馬なんだ。おまけに黒馬島のご神体でもある。夢と現実の間を行き来しても、ちっとも不思議はないんだよ」

”不思議はないんだよ”と言い切るジャンの方をラガーは、冷ややかな眼差しで一瞥した。この少年の存在ジャン自体がもう不思議じゃねえか。僕はレンボーヘブンの”大地”です。伝説の至福の島は”僕”ですと、言われても、俺には未だにそんなことは信じられない。

ラガーは、吸っていた煙草を灰皿に押し付けると、ため息と一緒に、口に籠った煙をふうと吐き出した。

「それに、ココ、お前が西の山まで追いかけていった伐折羅とかいう少年は、盗賊の長で、夜叉王って呼ばれるくらい冷酷な奴なんだろう。そいつとゴットフリーとの関係だって俺にはよく分からねえ」

「一緒にいるとヒヤリとさせられることは確かだけど、伐折羅は見かけも中身も噂とは全然違うよ！ 伐折羅はゴットフリーに率いられた闇の戦士が暴走しないように空を見張ってたの。ゴットフリーは突然現れて、また突然、空間の歪みに消えてしまうから」

すると、一言いたげにタルクが口を開こうとした。だが、ジャンがそれを制して言った。

「ゴットフリーが夢から覚めると、海の鬼灯だけではなく、邪神となったアイアリスまでがこの世に降臨してくると、霧花は言うんだ。だから、今、彼を絶対に起こしてはならない。触れてもならないとでも、傷だらけのゴットフリーをあんな怪しい花園に放っておけるわけがないじゃないか。そう告げると、霧花は3日だけ時間をくれと言った。そして、その間に僕は戦闘態勢を整えて、伐折羅を探せとも」

「伐折羅を？」

「だって、邪神アイアリスと海の鬼灯に勝つためには、”夜叉王伐折羅”が率いる、闇の戦士の勢力は絶対に必要だ」

「俺はぞっとするぜ。そんな絶対勢力の”夜叉王”と、夢から目覚めたゴットフリーが、また闇の王になって一緒に暴れたりしたら、黒馬島はグランパス王国の二の舞じゃねえか」

「そうならないためにも伐折羅が必要なんだよ。暴走する闇の戦士を制御できるのは、僕らの中では、あの少年だけなんだ」

「しかし、伐折羅は、七億の夜叉を引き連れ、崩壊と破滅が3度の飯より好きな”夜叉王”なんだろ。そんな奴がお願いしますって言っただけで、縁も縁もない俺たちを助けてくれるわきゃないだろ」

「いや、それは違うぞ！」

その時、タルクが溜まらず声をあげた。いつになく苛立った様子の彼に、テーブルについた一同は驚いたような視線を一斉に向ける。「伐折羅は天喜の双子の弟だぞ。縁も縁もないわけがないだろう！」
「夜叉王」なんて字は持^{あさな}っていても、あいつの生きがいは天喜と黒馬島を守ることなんだ。壊すことと守ること、そのどちらが欠けても伐折羅の心は満たされない。あの少年が壊したがっているのは黒馬島じゃなくて、島を食い荒らそうとしている海の鬼灯の方に決まっている。それに、光の世界でゴットフリーを支えているのがジャンならば、伐折羅は闇の世界でゴットフリーを支えているんだ。伐折羅は単なる度量の狭い破壊者とは絶対に違う。だから、あいつのことをよくも知らない輩が推測だけで、彼を悪く言うのはやめてもらおうじゃないか！」

2 m超もある巨漢が声を荒らげて怒ると、さすがに怖い。黒馬亭の2階の空気は、一挙に縮みあがってしまった。すると、慌てて、タルクは声を和らげ、

「……えっと、そういうことだから、まあ、とにかく、今、やるべきことは伐折羅を呼んで来ることだよな。天喜、お前、伐折羅の居所を知らないのか」

けれども、タルクの問いに、天喜は顔を曇らせ、

「悪いけど……あの子の居場所なんて知らない。それに、私、今、伐折羅には会いたくないの！ それより、ジャンたちは、夕食もまだなんですよ。私、フレアおばさんに言って用意してもらってくるから」

逃げるように2階の部屋を出て行ってしまったのだ。

＊ ＊

「何だろ？ あんなに向きになってる天喜って初めて見た」

「弟には会いたくないか……でも、あの感じは、ちょっとした姉弟喧嘩とは思えないな」

天喜の態度を不審がるココとラピス。すると、

「悪い。ちよつと、俺も用を思い出した」

タルクまでもが、がたんと席を立ち上がって、外へ出て行くのだった。

部屋に残されたのは、ジャンとラガー、それにラピスとココ。

「ちえっ、何か何だか良く分からねえが、あの別嬪さんの機嫌はタルクに取らせるとして、3日しか猶予がないなら、俺たちは、早急に黒馬島の守りを固めなきゃならないってことだよな」

ふてくされた顔で頬傷の男がつけた煙草の煙が部屋に舞う。すると、ラピスが、

「ラガー、お前、それ何本目だよ。吸い過ぎは体によくないんだぞ」
「余計なお世話だ。こうでもしてなきゃ、イライラの解消にならないだろう。いつ、姿を現すか分からない伐折羅を当てにしても仕方ねえ。住民たちの中で戦えそうな奴らをあつめて、俺たちは自警団を作ろう。黒馬島の人口なんて知れてるんだから、住民の名簿を作つとくと便利だな。名前と住所。見知らぬ者を見かけたら通報するシステムやいざという時に集まる避難所も必要だ。俺が聞いた情報では、海の鬼灯っていうのは、何故だか、鳥や少女に化けたがる。それも、みんなに広報しとこう」

「さすがはラガー。頭だけはいいいもんね」

「おい、ココ、頭だけって、どういう意味だよ!」

「だって、力はないじゃん」

ジャンは、彼らを笑って見ていたが、ラガーはゴットフリーも認めたほどの頭脳派なのだ。島の住民のことは、すべてラガーに一任するつもりだった。それにしても、3日は長すぎる。一刻も早くゴ

ットフリーを黒馬亭に連れて帰りたいのに……。そんな気持ちを察してか、ラピスがジャンの肩を軽くたたいて言った。

「ジャン、あまり考えすぎて暴走するなよ」

「分かってる。心配ないよ」

けれども、ジャンにはそんな自信なんて、これっぽっちもなかったのだった。

Chapter 19

「天喜、ちょっと待てよ!」

黒馬亭を出たちょうど玄関あたりで、タルクのごつい手が、天喜の細い腕をむずと掴んだ。

「離してよ。痛いじゃないの」

「お前、今日はどうしたっていうんだよ。伐折羅の話が出たんに機嫌が悪くなるなんて、弟と喧嘩いっかいでもしたのか。けど、俺はそんなのは、見たこともないぞ」

天喜は振り返りもせずに行ってしまうとする。だが、彼女の腕を掴んだままで、タルクは、

「もしかしたら、それって、お前たちの叔父のザールとサームのこ
とじゃないのか」

顔色を変えて黙り込んでしまった少女。

「やっぱり、そうだったんだな。あの業突く張りの二人が俺たちが黒馬亭に泊まってるっていうのに、顔を見せないのはおかしいと思
っていたんだ。伐折羅と奴らの間に何があった? あいつら、一体
どこで何をしてやがるんだ」

「……二人はきつと……もう、この世にはいないわ」

「えっ」

どうしようもなく気まずい空気が、二人の周りを取り巻いてゆく。
タルクは掴んでいた天喜の腕を離すと、月の隠れた空に目を向けた。
重苦しい灰色の雲が切れ切れに西へ流れてゆく。

「ザールとサームは伐折羅に殺られた……っていうのか」

深くため息をついてから、泣き出しそうな天喜に目を向ける。

「でも、俺はあいつが理由もなくそんなことをするとは思えないん
だが」

すると、

「もともと、弟は叔父さんたちを嫌っていたし、あの時……あなたたちが黒馬島を去った後に、紅の花園で母さんが死んだことや、サーム叔父さんがゴットフリーを騙したことを知った伐折羅は、部下の盗賊たちに命じて二人を西の山へ連れて行ってしまったの。それから、叔父さんたちの姿を見た者は誰もいないわ」

「ってことは、ザールとサームは行方不明で、殺されたって確証があるわけじゃないんだな」

ところが、気休めのようなタルクの言葉に、天喜は首を横に振った。

「“あいつらは、西の山に埋められて骨になってる” って……。盗賊たちが自慢げに話してた。直接、手を下したわけでもなくとも、伐折羅の命令で二人は殺されたのよ……。どんなに酷い人たちであっても、私はそんなことをしてしまふ、あの子が怖い。それなのに、目の前に現われる弟は、今まで通りの引っ込み思案で私の後ろに隠れているような綺麗で大人しい子。どちらが本当の伐折羅なの？ 私、あの子を嫌いになりたくないの。だから、今は絶対に会いたくない！」

天喜の気持ちがタルクには、痛いほどよく分かった。彼自身だって、あんな気弱で哀しげな少年と夜叉王、伐折羅が同一人物だなんて、今だって信じられないくらいだ。

「でもな……。あいつが天喜と黒馬島を大切に思う気持ちには嘘偽りなんてない。天喜が幸せになることが、伐折羅の望みなんだ。それは、お前も分かっているんだろう」

心配げに顔を覗き込んでくる大きな顔。ごつい体とは裏腹のタルクの優しげな瞳を天喜は、無言で見上げる。そう、いつも、この柔らかな眼差しが彼女の心をほっと和らげてくれるのだ。天喜は小さく微笑んだ。

「私にだって、それは分っている。でも……」

「でも、何だ？」

一瞬、躊躇した様子で、天喜は口を噤む。けれども、

「タルク、私ね、どうしても、聞いておきたいことがあるの」

「……？」

「あなたは覚えているわね。以前に、ゴットフリーが右胸に酷い刺し傷をおって黒馬亭に戻ってきた時のことを」

今度はタルクが口を閉ざす番だった。

忘れるもんか。あの時、黒馬亭の扉を開いたとたん、目に飛び込んできた炎馬と、そこから俺の上に倒れこんできた、ゴットフリーから流れる夥しい血の紅の色を。けれども……

「あの時、ゴットフリーを刺したのは誰？」

その天喜の問いにタルクの心臓は、どきりと音を高めた。

駄目だ。どんなに問い詰められても、これだけは、天喜には言えない。

「さあ、俺にもよく分らんが」

「誤魔化すのは止めて！ ゴットフリーの右胸にあの傷をつけたのは伐折羅なのよ。ゴットフリーは黒馬島のために海の鬼灯と戦ってくれたのに……伐折羅はあんなに彼を慕っていたのに、何故、そんな酷いことができたの？ それが、あの子が持つ夜叉王の気質のせいだというなら、私は絶対に弟を許せない！」

タルクは、また、ため息をついた。頬をなでてくる湿気を含んだ風が、居心地悪さを更に悪くする。彼女にかける言葉が見つからず、雨になりそうな気配に空に目を向けた。そういえば、月明りもすっかり見えなくなってしまった。

ぽつりぽつりと顔に落ちてきた雨粒を払いのけて、巨漢の男は、

琥珀色の瞳を曇らす少女に言った。

「俺にも、伐折羅の気持ちを十分に受け止めてやることはできない。ただ……少なくとも、伐折羅に刺された当の本人、ゴットフリーはあの傷のことを恨むどころか、傷を消そうとしたジャンを凄い剣幕で拒んだそうだぞ。“この傷は伐折羅との約束の印”だと言って」

「伐折羅との約束の印？」

腑に落ちぬ顔の天喜。そんな少女に、

「幻の黒馬を見たココは言ってたじゃないか、ゴットフリーは自分が消えた後の黒馬島の空を、伐折羅に任せていなくなったと。それって、あいつが伐折羅を信じて頼りにしてるってことじゃないのか。だから、もう弟のことを悪く考えるのは止めにしないか」

「……」

納得がいかないうような天喜に笑みを浮かべ、タルクはその背を軽く叩いて言った。

「ほら、早く、行った、行った。フレアおばさんの所へ夕食を頼みにゆくんذار。雨が酷くなってきたし、このままじゃ、すきっ腹を抱えたラピスとココのお腹と背中がくっついちゃうぞ！」

まだ、何か言い残した顔をして、フレアおばさんのいる厨房へ駆けて行った少女。その後姿を見送りながら、タルクは強さを増してゆく雨に眉をしかめた。紅の花園に置き去りにしてきたゴットフリーのことが、気になって仕方がなかったのだ。

あんなに酷い怪我をしてるっていうのに、こんな夜に、雨ざらしか。

そう思うと、居てもたってもいられない。タルクはくりりと黒馬亭に背を向けると、紅の花園のあるサームの館へ向かって走り出した。

＊ ＊

「雨が酷くなってきたよ」

黒馬亭の2階の窓から外の景色を眺めながら、ココが言った。

「これは止まねえぞ。今夜は一晩中、降り続くんだろうな」

ラガーがてんこ盛りになった灰皿に煙草を押し付ける。その煙が消えないうちに、テーブル席に座っていたジャンが、がたと音をたてて席を立ちあがった。

「僕、ちょっと、外を見てくる！」

「おい、外って、ジャン、もう夜中……」

けれども、ラピスが制止する前に、もう、ジャンは部屋を飛び出してしまっていた。

階段を駆け下りてゆく音と、黒馬亭の扉を開ける音。激しく大地に叩きつけられる雨の音。それらに交じり合ったジャンの心臓の鼓動が、ラピスの耳の感覚を刺激してくる。

「……本当に大丈夫なんだろうな」

ジャンの行く先はゴットフリーのいる紅の花園に決ってる。これ以上、待てと言われて、あいつに我慢なんてできるんだろうか。

そんなラピスの悪い予感を上塗るように、雨音は更に強さを増していった。

Chapter 20

黒馬亭を飛び出して、居住地を駆け抜けて行く。家々に灯る明かりは激しく降る雨の勢いにかき消され、紅の花園があるサームの屋敷跡への道は、漆黒の闇に塗りつぶされたかのようなだった。

断続的に続く雨の音だけが辺りに木霊している。そんな暗い景色の中で、紅の花園のある場所だけが、澱んだ紅の光を浮かび上がらせていた。

紅の花園の入り口でジャンは、突然、足を止めた。そこに普通の数倍も、かさ高な人影を見つけたからだ。

「タルク！ タルクじゃないか。お前、そこで何やってんだよ」

全身、ずぶ濡れの巨漢はむっつりと顔をしかめて、

「何をつて、こんな雨の中にゴットフリーを放っておけるかよ」

ジャンは、その言葉に逆らう気なんてまったくなかった。

* *

雨に流され、頭を痺れさすような花の香は今は成りを潜めていた。それでも、不穏な紅の光の元で、うつ伏せに倒れたまま激しい雨にさらされている男の姿に、ジャンだけでなく、タルクまでが胸が痛くなった。顔にはまったく血の気がなく、その頬に冷たい雨が流れている。

「ジャン、ゴットフリーを黒馬亭に連れて帰るぞ」

たまらず、倒れている体に手を伸ばした時、

“約束は3日後のはず！ どうしてそれを守らないの！”

突然、手元を通り過ぎていった風にタルクは眉をしかめた。指先

に裂傷ができ、血が噴出している。その直後に彼らとゴットフリーの間を遮るように漆黒の乙女が姿を現した。

霧花、レインボーヘブンの欠片”夜風”

「おい、いきなり、こんな痛え挨拶はないだろ」

「あなたがたが、勝手なまねをするからよ！」

「3日が何だっていうんだよ。霧花！ お前は、こんな冷たい雨の中にゴットフリーを置いておけっていうのか。この花園はもう、現実世界で彼の夢の中じゃないんだ。傷は悪くなるばかりだし、寒さは体力を奪ってゆく。こんな場所に放っておいたら、本当にこいつは死んじまうぞ」

“まだ……大丈夫。まだ、彼は耐えられる。それよりも、あなたがたは、伐折羅さえも見つけてはいないじゃないの。今まで、ゴットフリーがやってきた事を無駄にしたくないなら、まず、敵の攻撃に耐えられる戦闘体勢を整えて！”

「伐折羅？ 戦闘体制？ 何でそんなものに頼ろうとするんだよ……」

唇を噛み締めて、じっと何かを堪えているジャン。小刻みに震えている少年の肩を見て、タルクの胸に一抹の不安がよぎっていった。まずい……こいつはゴットフリーのこととなると、歯止めがきかなくなっちまうから……。

「おい、ジャン……」

おずおずと少年の肩に手をかけ、顔を覗き込んでみる。

そんなに、ゴットフリーが夢の中に閉じ込めた女神が、海の鬼灯と一緒に攻撃してくるのが怖いのかよ。

僕がいるのに。

レインボーヘブンの礎である、この僕が。

倒れているゴットフリーの廻りには強い雨にも関わらず、紅の花が忌々しいくらいに鮮やかに咲き乱れている。

唇を震わせて、両の拳を握り締めた少年の足元が蒼に輝き出した。その瞬間に、彼の肩に手をかけたタルクの巨体に、ぞくりと悪寒が走った。

「お、おいつ、ジャン、お前っ、あ、足元っ!？」

タルクが寒気を感じたのも無理はなかった。ジャンの蒼に輝いた足元から地面が凍り出したのだ。ぴしぴしと音をたてながら、それは同心円を描くように範囲を広げてゆく。

「そんなに奴らの攻撃が怖いなら、僕が氷のシールドで黒馬島を覆いつくしてやる。アイアリスも海の鬼灯も、一匹たりともここに入りこめないよう、空も海も大地もすべてを凍らせて！」

「ジャン、止めろっ！ 冷静になれっ」

タルクの脳裏に、グラン・パール島で、ジャンが空から襲ってくる海の鬼灯をすべて凍らせてしまった時のことがよぎっていった。冗談じゃないぞ！ けれども、

黄金に輝き出した少年の瞳。体からほとぼしる蒼の光と暴風。駄目だ、もう、俺にはこいつは止められない！

「うおおおおおお!!」

わけの分らない咆哮をあげだしたジャンの傍を離れ、タルクはゴットフリーの元へ駆け寄ってゆく。

「霧花！ どうにかしろよ！ お前もレインボーヘブンの欠片だろ！」

「無理よ！ ジャンの力を止めれる者なんて、ここには誰もいない！」

そうしているうちにも、氷の範囲は広がってゆく。へたをすると自分自身も凍りついてしまいそうだ。しかし、どうすりゃいいんだ？ このままだと、人も物も容赦なしに、黒馬島、全部が氷に包まれてしまう。

足元から、鋭い声が響いてきたのはその時だった。

“黒馬島は僕が保護する！ だから、タルクと霧花は自分の身とゴットフリーを守って！”

タルクは、蒼の光を打ち消し、寒気を溶かしながら広がってゆく黒銀の光に、はっと目を見開いた。

「クロか?! 黒馬島の大地の主！ お前ならこの場を何とかできそうか！」

“とりあえずは、土の部分だけだ。空と海までは俺の範囲じゃない
デリトリ”

「それでも構わねえ!! とにかく黒馬島を守ってくれ!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3760t/>

アイアリス ～闇の女神 夜明けの大地～

2011年11月4日03時06分発行